

ペピの観察記録:0歳

■初回の訪問 ペピ;6週&4日目 1974/01/31(5:00-6:10pm)

私が訪うと、Mrs. Pが玄関口に現れた。普段着のままのきどらない格好で、頭にスカーフを巻いていた。Mrs. Pですかと尋ねると、彼女は、とても柔らかなリラックスした声で、<ええ、そうです>と私をまっすぐに見詰めて答えた。玄関の扉を閉めながら、私に道順は大丈夫分かったかと尋ねた。それからどちの道から来れば一番近道かを話題にし、それで二人とも再び扉の外に出た。彼女は地下鉄への道順を丁寧に指し示してくれた。私はちょっと緊張していた。というのは彼女が私をじろじろと注意深く眺めているように思ったからだ。それから中へと入り、階段を上っていった。そのビルの3階がお住いのフラットなのだ。その階段の先の廊下には2つの大きな整理筆筒が並び、その棚にはたくさんの書籍が詰まれている。また珍しい彫刻で明らかにアフリカ産と思われるものが並んで置かれてあった。それから壁にはアフリカの人々を描いた見慣れない絵画が飾られてあった。彼女は幾分照れ笑いしながら、<あんまりいっぱい物が溢れていて、部屋の中に収容しきれないの。子どもが大きくなったら、さて、どうしたものやらと思ってるのよ>と気さくに私に語る。それから私たちは居間へと入った。

私はすばやく室内を眺め回す。カウチには毛糸で編まれたお人形さんが置かれていたり、部屋の隅にはアップライト・ピアノがあり、他にも家具があり、書棚には本類が溢れんばかりに詰まっていた。壁にはプリミティブ・アートの類いの絵が壁中に所狭しと、ごく気取らずに画鋲で留められてあった。とても快適なくつろげる空間に思えた。だが、私は簡潔さ *simplicity* をモットーとしているから、狭い部屋にあまりにも物がひしめいているのがちょっと神経に障った。しかしピアノの鍵盤の上にあったモーツァルトの楽譜を見て、私の気分はちょっと晴れてリラックスできた。おそらく互いに何かしら似たような関心を期待できる人なのかもしれないと思ったからだが…。私のコートを彼女は受け取ってから、すぐさまくさすと、じゃあ何かあったかい飲み物でもいただきませんか。何がいいかしら?>と私に尋ねた。ジャスミン茶はどうかと彼女が言ったので、私は喜んでと応えた。そこで私たちはキッチンへと向かった。やかんのお湯は沸いていた! 台所はそこそこ広くて、キッチン・テーブルがあり、ガス・クッカーやらオーヴンやらが揃っていた。それには大きな冷蔵庫も…。彼女は、今さっき買い物から戻ってきたところなのと言って、お喋りを始めた。彼らの自家用車が故障し、修理に出していて、それも何時戻るのか分からないとやら。とにかくそれで歩いて買い物に行かねばならないというわけで、しかも彼女の赤ちゃんが店内で泣き出すし、もう散々というわけで、<もうまるっきりすべてがおかしくなっちゃったみたいなの。あーあ、でも、もう気にしないわ。何とかなる…>と気を取り直す。その一方で、彼女はお茶の支度に忙しい。私がお子さんは何人いらっしゃるのですかと尋ねると、<一人。一人だけなのよ。これは私の2番目の結婚なんだけど、私は以前の夫とは十年も連れ添ったことになるの。でも彼は子どもを作れなかったの。私はたくさんの子どもが欲しかったんだけどね。だけど彼は子どもを作れない人だったわけ。私は40歳になる。だからこれから子どもが産めるとも思えないし…>。彼女の声音はちょっと淋しげであった。そこで私は何かしら彼女を慰める言葉を掛けられたらと思う。<でも、40歳過ぎてても多くの女性が子どもを

産んでますわよね」と言う。彼女はくうん、でもね、私は母親が42歳のときに生まれたの。だけど、私はどう考えてもそんなこととも無理だと思ってしまう…。だからね、これが私のただ一人の子どもだって、そう思う」と応えた。私が彼女に、赤ちゃんは男の子なのか女の子なのかと問う。彼女はく男の子よ」と言って、微笑んだ。私も思わず、くあら、すてき！>と言う。すると彼女も晴れやかな笑顔で、くそうよ、私の夫もとっても喜んでいるの。男性ってやはり男の子がいいみたい…>と言う。

再び居間へと戻り、彼女は紅茶を茶碗に注ぎ、私に手作りのクッキーと一緒にお茶を勧めてくれた。ここで私はテーブルの上にあった小さな灰皿に目が留まった。それはある工芸品というか、なかなかすてきで、つくるともいい、ほんと、なんてすてきなのかしら」と言う。すると彼女はくこれって、私ね、以前陶芸に挑戦したことがあって、その最初の作品なの。私は陶芸にはあまり向いてないみたい。なんか変でしょ。でもなんと言っても私の最初の作品なんだから、取って置こうと思ったの」と応える。私がくあらまあ、ほんとに。私はアンティークで買ってこられたのかしらって思いましたの」と言うと、彼女は朗らかに笑い、彼女がカレッジで実習したハンドクラフトについてお喋りを始めた。彼女は私に壁に飾られてあった彼女の描いた絵やら他にもとても魅力的な切り紙模様を見せた。彼女は主にクロス・パターンと染織をやったという話をした。そこで「クロス・パターン」というのがピンと来なくて、ただその言葉を私が繰り返すと、彼女は私のスカートを指し示し、そこにあった図柄をくほら、これのことよ」と言う。そこでそれがどういうことかを知り、なんて面白いのかしらとも思う。それだけではなく、彼女がなぜ私のスカートをじろじろ注視していたのかを知り、なるほどそうだったのかと得心する。それでちょっぴり居心地悪かったのだが、お蔭でどうやら気が楽になった。

彼女は私に【タヴィストック】での研修コースについて問い、【フィッツジョン・クリニック】から往診に来てくれるヘルス・ビジターが【タヴィストック・センター】の研修生に赤ちゃんの観察の機会を与えてはくれないかと相談されたということを語った。赤ちゃんがどのように育ってゆくのか、また母子間での関係性がどのようなものかということを観察するために聞いたとか。くあらまあ。ええ、喜んで…でも…と言ったの」と、彼女は問題をあれこれ語りだす。最初に、彼女の赤ちゃんの睡眠と目覚めの時間が最近変わったということがあり、観察にはどっちの時間がいいのかということ。2番目には彼女は今産休を取っており、それも4月になれば、職場復帰しなければならないわけで、彼女は子どもを日中どうしたらいいのか、どうしたって‘施設 institution’に預けるのは彼女にしたら気が進まないわけで、でも授乳をどうしたものかと頭を悩ませているんだとか。最後に、彼女は校長 head-mistress 職に応募しているところで、それがどうなるやら検討も付かないわけで。そうしたあまりにもたくさん煩雑で頭を悩ますことがあり、整理しなくちゃいけないというわけで、彼女はちょっと混乱ぎみの体なのだった。しかしながら、われわれは私の訪問時間について話し合った。彼女はくそれって一年間ということなの？>と尋ねた。私は、くはい、週1回で一年ということになります。長いですわよねえ」と些か申し訳なきように応えた。どうやら彼女にはちょっと荷が重そうに思えたものだから。しかし彼女はすぐさまくいや、いや、全然かまわないのよ…>と朗らかに、私を慰めるように言った。それで私も少しリラックスした気分になった。

突然彼女はくあら、ごめんなさい。あの子、お腹空いているわ>と立ち上がる。私はあれっと思ったが、直にどこかで赤ちゃんの泣き声が耳に入った。そこで彼女に付き従った。しかし、そこで偶然ながら電話が鳴った。彼女は赤ちゃんが居る部屋の方を私に指し示し、電話に出た。私はその寝室へ入ってゆくと、大きなダブル・ベッドの脇に小さな揺りかご(コット)が置いてあった。そこに彼は居た。うつ伏せになって、憐れっぽい声でむずかかって泣いていた。私は彼の背中を優しく撫でて、<泣かないのよ>と声掛けをした。しかし彼はいっそうのこと激しく泣き出した。そこで私は仕方なく彼を腕に抱きかかえることになった。驚いたことに、彼はすぐさま泣きやんだのである。いくらか眠たげであったが、瞳は大きく見開いていた。見た瞬間、彼の顔の眉間に縦じわを認め、いかにも‘神経質’な感じがして、彼はまた直にぐずるに違いないと思ったもので、なんとか彼のご機嫌を取ろうとした、彼に話しかけ、彼の目の前でネックレスを振って見せたり・・・だが、うまく彼の注意を引いたとは思えない。彼の眼は私の顔にもネックレスにも焦点づけられはしなかった。まるっきりくどうなっちゃてるのか、さっぱり分かんないよー>といった感じで戸惑っているみたいなのである。そこへ母親が現れ、すぐさまくあらまあ、赤ちゃんの世話に慣れておいでなのね>と私に言う。私がくなんてハンサムな子どもなの、そうですわね>と言うと、彼女は笑い、彼の顔に近付いて、<それはどうかな。ねっ、でしょ?>と彼に言う。私がくここはちょっと冷えますよね>と言うと、彼女はくあら、そうね。この子のショールを取ってこなきゃ。とにかく居間に戻らなきゃ。そのまま抱いて連れてきてくださる?>を私に頼んだので、喜んで私はそうしたのであった。

私たちは居間の椅子に落ち着いた。私は腕の中に赤ん坊を抱いたままだった。それで<6週間の赤ん坊なんて、おサルさんの赤ちゃんと違わないと思ってたけど、でもこの子はなんて綺麗なのかしら。お顔がまったく人間らしい。とても賢そうじゃありませんこと、そうですわよね>と言う。Mrs. Pは私と赤ん坊を眺めていた。(彼女は私たちを観察していたに違いない!)私が彼女にくもうそろそろ授乳なさいます?>と尋ねて、彼女に赤ん坊を手渡した。彼女は私に赤ちゃんのお世話の経験があるのかと問うた。私は無いと応えた。それからく私も、4歳以上の子どもというのは経験があるんだけど、赤ちゃんって私にとっても初めてなの。以前流産を3度もしてるの。この子を授かったとき、もう奇跡だと思ったのよ。ほんとに奇跡だわ・・・>と彼女は考え深げに言う。<だからね、クリニックから戻ったとき、赤ちゃんってどうしたらいいのかまるで皆目見当が付かなかったのよ。私の夫の方が気安く世話が出来たというわけなの。アフリカの人たちって、大家族で育つでしょ。だから始終赤ん坊が身近にいるというわけだから。とても慣れているのね。私の夫の姪がやってきたことがあるんだけど、彼女なんてもう直観的に赤ん坊をどう面倒みたらいいのか分かってるの。・・・まあどっちにしろ、どの子も赤ん坊ってユニークよね。私もユニークですわね。そこでわれわれの間で何が一番良いやら徐々に分かってゆくしかないのね。それでね、この子が彼流にどうしようとするやらを観察してるというわけなの。・・・赤ちゃんについての本たくさん読んでみたのよ。普通本を読んで、その中からいいなと思うことを捨てることにしてるわけだけど。書いてあることすべてをそのまま鵜呑みにすることはしないの。だけどスポック博士の育児書は結構役に立ったわよ。何ごとか問題が起きたといったときにはね。例えば、朝方の3時に、彼は目覚め、眼を大きく開けている。そうすると私はこの子は何か変なのかしらと思う。だけどスポック博士は、それはごく普通にあることです。心配は要りません。全然ですよ。万事うまく行きますから・・・>と言うわけよ>と笑いながら語る。

彼女は身に付けていたブラウスのボタンを外し始めた。〈お腹空いたかしら、どう？〉と声かけしながら、彼女は彼を授乳する体勢を取り、彼にオッパイをあてがった。彼はまだ眠たげであり、やや空漠とした目付きのままである。母親はしばらく待っていたが、彼は乳首を探そうとする気配は見せない。そこで結局のところ、母親は彼の口へと乳首を軽く差し込もうとした。すると彼は突如それを掴もうとする動きを示す。しかし、しっかりというわけにはゆかず、乳首はすぐ彼の口から抜けてしまう。それから母親はオッパイを手で支え、乳首を啜えられるように補助した。そこで今やどうにか問題なしに彼はそれを口にふくませ、ごくごと音を鳴らしながらむさぼるように飲み始めた。

私が母親に赤ん坊の名前を尋ねた。彼女は3つの名前を語った。ペピというのが1つ、そしてあと2つはアフリカ語では‘冬’とか‘日曜日’という意味の名前である。その他にもあって、時折彼女は彼のことを‘Little Suck(おしゃぶりちゃん)’と呼ぶんだそう。なぜなら、彼はオッパイをすごい音を鳴らしてごくごく飲むからなんだとか。実にその通りである！それで私たちは一緒に笑った。そしてまた彼女は彼のことを‘Genius天才’って呼ぶんだそうだ。それは冗談なのだが。そしてユーモアたっぷりに、〈それでね、ペピが何かするでしょ。ごく普通にどの赤ん坊もすることなんだけど。その度に夫がね、ほら、‘天才’を見てご覧よ！って言うわけなのよ〉と笑う。

ペピは吸うのを止め、口から乳首を離れた。そしてそのままじっと待つ。まるで次には何をしなきゃならないのかよく分かってるといった具合に。そこで〈ゲップをするのかしら？〉と私が言うと、母親はそうだと応えて、彼を膝の上に乗せて懐ろに抱き寄せ、その背中を優しく撫でた。〈クリニックの看護婦で、ナイジェリアからの女性なんだけど、彼女が言うには、赤子にゲップを促すには立て抱きといって頭を肩に乗せて抱きかかえるといいとか、それで背中をトントンと叩いたり撫でたりするのももいいし、しなくてもいいし、どちらでもいいって言うの。でも普段私はこうしてるのよ〉と私に言う。ペピはとてももの静かで、どこか遠くを漠とした感じでジッと眺めている。母親は彼が私のスカートを見ていると思ったようで、〈ねっ、とてもすてきなスカートだね〉と語りかけた。しばらくして突然彼は大きなゲップをした。それも3回も続けざまに！ 〈おお、よくやった！ほんとうにこの子ってよくゲップするの。だから授乳にはたくさん時間が掛けるわけなの。そうでもしないと、カナキリ声を上げることになるわ〉。母親は、再び彼を授乳の体勢に戻した。それから2,3分ほどごくごく吸って、それから吸うのが止まった。まるでくさあて、この次、どうなるかな〉の様子眺めといった、実に落ち着いた感じなのだ。そこでわれわれは待った。シーンと静まりかえっている。だが何も事は起こらない。私が思わず〈あらまあ、もう早くー(Come on!)・・・〉と口走ったもので、二人とも笑ってしまう。それから母親が、〈ほらね、オッパイを吸うというのは赤ん坊にとってとても大仕事なのよ〉といかにも共感めいた態度で語る。ペピは大きくゲップをして、ミルクを口からちょっと漏らした。母親はそれを拭いてあげる。彼は彼女の膝の上にとじとそのまま動かさずに、焦点のぼやけた表情でじっと遠くを眺めている。彼はまるで自分の‘内側’から何かが出てくるかのように思っているかのようだった。彼は身をちょっとくねらせた。それからすばやく顔が赤くなった。彼のからだは強張り、身を振った。それは私には何やら‘拷問’めいたふうに映った。母親は〈内側に何やら痛みがあるようね〉と言う。そしてやさしく彼の背中を撫でてやって、ゲップを促す。そして2,3分ほどで徐々

にすべてが消え失せた。ペピは再び母親の膝の上で何ごともなかったようにおとなしくなった。ここで私はお暇をしなくてはならなかった。セミナーに遅れそうだったからだが、それでMrs. Pと翌週に訪問する時間を約束し、そして授乳をどうぞお続けくださいと言って、私は一人で部屋を辞去したのである。

■第2回目の訪問 ペピ; 7週&2日目 1974/02/05 (5:00-6:15pm)

Mrs. Pが玄関先に出迎えてくれた。とてもスマートな装いで、髪の毛も短くすてきにセットされていたので、前回と同じ人かと疑ったほどであった。われわれはお天気についてちょっとお喋りをした。それから彼女はまずはお茶をというわけで、二人一緒にキッチンへと赴いた。すぐに洗濯機の中を示して私に見せた。そこにはなにやら小さな白いゴミがあちこちにくっついている様子であった。そして私にくもう大変だったの。実はペピのオムツかぶれが心配で、それでクリニックのドクターに相談したら、オムツを洗うのに《Persol》は使わないほうがいだろうと言われ、それで別の洗剤にしたわけ。それがすべての事の起こりで、くもうこの洗濯機を窓から放り投げてしまいたい気分だったのよ。ほんと、そうしうになったの>と笑って言う。或る筋の電気メーカーの説明では、洗剤とオムツの素材のコンビネーションでそうしたことも起こりうるとのことだとか。もうほんと嫌気がさして、それをそのままほっといて買い物に出かけたんだとか。それで外から今戻ってきたばかりだとのことだ。再び洗濯機の中からオムツを一つ取り出し、水洗いを試みた。一方で私にお喋りを続けながら、くほんと、今日はまったくついてない日だったわ。この洗濯機を一年以上も使っているけど、一度もトラブルなんてなかったのよ。どういことなのかさっぱり訳がわからないわ>と言う。それから気を持ち直すようにして、友だちから嬉しい小包が届いた話をした。それから彼女は私に幾つか質問をした。日本に戻ったら、どうする予定でいるのか、治療対象を成人にするのか子どもにするのかと。彼女は私が語ることにとても興味を示した。くあら、そうなの。子どもに興味がおありなのね。それで子どもがどんなふうに育ってゆくのかを学ぼうとしてらして、それで赤ちゃんを観察する経験を必要としているというわけなのね>と大きく微笑んだ。く問題のある子どもを相手にする場合、正常なnormalな発達というスタンダードがあれば、何がどう問題なのかのアイデアを持てるわね。なるほど、だから正常な赤ちゃんの観察をしてるというわけなのね。..(ちょっとたじろいで)あらまあ、私の赤ちゃんは決して正常とも言えないわね。まったくペピは正常じゃないわ>と笑って見せた。私が、く実際のところ、これが正常だとかあれが異常とかは言わないことにしているんですけどね>と言うと、くええ、ええ、ほんとに。なぜって皆どの子もそれぞれに個人 individual であって、正常も異常もないんですものね>と応える。

われわれは居間に移り、お茶をいただく。彼女はくあの子が目覚めたら、お風呂に入れようと思うの。直に目覚めるはずよ>と言いながら、腕時計に目を遣る。それから彼女は私にく赤ちゃんが入浴しているのをご覧になったことあった?>と尋ねた。私はいいえと答え、ちょっと間を置いて、くそう言えば昔、日本の公衆浴場で、赤ちゃんが母親の腕の中に抱えられて、風呂に入ってるのを見かけたことがあったわ。誕生して2,3日しか経っていないような小さな赤ちゃんだったけど..>と話す。私が日本の公衆浴場というものがどんなものか説明するのに戸惑いを覚えていると、瞬時にくそうそう、そう言え

ば映画で見たことがあったわ。日本の人は風呂と一緒に入るのね」と応えた。何やらきまりが悪くてちょっと顔が赤らんだ。そして「西欧諸国の人たちにしてみれば、なんだか奇妙な風習に見えるでしょうね」と言うと、彼女はすばやくそれを否定した。「あら、そうでもないわよ。お風呂を一緒に入るのが好きな人だっているもの」と答え、それからちょっと間を置いてから、彼女はちょっとニタツと口元を歪め、「私が入浴するときね、いつも携帯ラジオと本とを風呂場に持ってゆくの。それで泡だったお風呂の中に横になり、読書するの。音楽を鳴らしながら…。だけど、夫のJ. は全然違うの。彼はからだに石鹸を付けてゴシゴシ洗い、それから水を替えて、からだに水を掛けて終わりよ。つまりね、彼がアフリカにいた頃、家の側の川へ飛び込んでね。それが‘彼流’の入浴というわけ。だからね、私の夫にとっては、入浴というのはやむを得ない日常の決まりでしかない。だから体を清潔にするということには真面目なんだけど。だけど私にしてみれば、お風呂ってちょっと贅沢なリラクゼーションなのね」。しばらく間を置いてから、彼女は（淡々とした表情で）、*「私がJ. と結婚する前だけど、パキスタン系の男友だちがいたのよ。彼はお風呂を一緒に入るのがすごく好きでね。そこでバスタブの片方に彼が坐り、もう片方には私が坐り、お互いに向き合ってたの。それで彼は私に詩を朗読してくれたの」と朗らかに笑う。時々私、J. に言うのよ、その話を。それで、ねえ、どうして私に（お風呂で）詩を朗読してくれないのって訊くわけよ。彼は、もう、そんなのバカみたいだ…って全然取り合ってくれないんだけど…」*と可笑しそうに笑う。

ここで突然「あらまあ、あの子、目が覚めたみたい…」と言って立ち上がり、部屋の隅にあった椅子の上にあったキャリコット〔携帯用ベッド〕へと近付いた。彼は実に静かで物音一つ立てずにいたので、私はペピがそこに居たのをまるで気づかなかった。母親が突然ペピのことに触れたので驚いたのだが、だが数秒してなるほど確かにそのキャリコットから何やら音がしているのを耳で確認した。Mrs. P. は「いい子、かわいい子(My darling, My sweet-heart)…お目覚めなの?」と言いながら、彼を腕に抱き上げ、それから椅子に戻ってきた。ペピは母親の膝の上に坐り、眼は堅く閉じたままである。まだ眠っているかのようである。しかしながら唇は幾らかモゴモゴと動いている。それから2,3分後に彼の顔の表情ははっきりとしてきた。顔をしきりにしかめてながら、唇やら頬がびくびく動いている。突如片方の眼が数秒ほど大きく開いた。まるで外界をちょっと覗き見したみたいであった。それからそれは閉じられた。それから顔の表情の動きは続いて、ブブブーやらと音を発した。Mrs. P. はやさしく彼の背中を撫でていた。「ペピは昨晚ひどい状態だったの。ずうっと泣きどおしで、2時から明け方の5時までよ。実際それって私がいけなかったの」と言い、私にその理由を説明した。その前の日、彼女は或る特別なインド料理を作った。かなり辛い唐辛子をたくさん使ったのである。それでペピが下痢を起こしたのは明らかだというわけだ。「だからね、この子、今日はあまり気分が良くないはず。いけないママなことね」と、彼女はペピに謝るふうに語った。「ごめんね、ママがいけないことしちゃったのよね」と言わんばかりだった。彼女がそれをJ. に話したら、彼は「そんなバカなことがあるはずないよ。アフリカでは毎日のように辛い唐辛子なんていつも常食にしてるよ」と言ったそうなの。「だけど、アフリカの赤ん坊は、産まれたからすぐにほんの少しずつ辛い唐辛子を食べさせられているとしたら、徐々に体が慣れてゆくでしょう。だけどペピにしてみれば、まるっきり初めてのことだもの。お腹を壊したに違いないのよ」と、真顔で彼女はそう語る。

この時になって、ペピはようやく目覚めた。母親の膝の上に坐って、じっと身動きしないまま。Mrs. Pはくペピの入浴の準備をしなくちゃ・・だけとお湯に入るまでに、たくさん足蹴りをさせなきゃね>と言って、寝椅子の上のマットレスに彼を仰向きに寝かせた。それから彼女は彼の方に屈んで、彼の頬をかるく撫で、<いい子ねえ、かわいい子(Oh, darling, Sweet heart!)。ほらほら、笑ってみせて・・ねえ、笑って・・>と言う。母親は大きな微笑を彼にする。ペピはなにやら真面目くさった顔で、母親の顔をまっすぐに見詰めていた。それからいかにも母親の朗らかな声音に感化されたようで、彼の表情は徐々に反応し始めた。彼は母親が彼に何ごとか(それもいいこと!)を為せと励ましているのが分かるようであった。そこで彼はどうか微笑を浮かべた。それも大きな微笑を2回もである!それは実に素晴らしい場面であった。そこで私も些か興奮ぎみとなり、<あらまあ、笑ったわ>と言うと、Mrs. Pは<ねっ、でしょ?!>と言わんばかりに私の方を見た。さて、ペピは‘足蹴りの体操’をかなり力強くやっていた。勿論腕も脚もただバタバタとチグハグではあったけれども、それがちょっと可笑しくて私は思わず笑いかけた。Mrs. Pはペピの入浴の支度に余念がない。ベビーバスにお湯を満たしていた。その傍らで私は彼を笑わそうと試みる。私の顔に焦点は合っているものの、どうやら戸惑っているふうなのだ。私は彼の気を引こうと懸命であったが、結局私が彼から得たのは、彼の弱々しげな微笑が一つで、それも途中で尻すぼまりとなり、あっけなく消えてしまった。

入浴の準備が出来た。母親はペピの上着を脱がせた。彼はクスンクスンと泣き声をあげた。母親は彼のからだを厚手のバスタオルで包んで腕の中に抱えた。彼は少し身をよじった。そこで母親は<あれ、抵抗してるってわけなの、そうなの?>と言うと、彼はじっとおとなしくなった。母親は彼のからだを左手でしっかりと抱え、右手で彼の頭をシャンプーする。素早くやさしく入念に・・。それから彼を再びマットレスの上に置き、頭をタオルで拭いてやる。彼の毛髪はいまやぐるくと巻き毛になっている。Mrs. Pはちょっと笑って、<ほらね、ペピの髪っていつもはまっすぐなの。だからJ. はね、髪の毛がまっすぐだね、俺の子じゃないねえ・・って言うわけ。ペピをからかっているわけなのよ>と微笑する。

Mrs. Pはペピのオムツを外す。それからその中を覗き、<あら、ちょっとだけだわ。まあ、悪くはないわね>と言って、それを脇へどける。彼女は裸のペピを両腕で抱え、<これから入浴ですよってことが分かるみたい、そうでしょ?>と彼女は言って、彼を安心させるように笑いかけた。ペピのからだをベビーバスのお湯のなかにやさしく沈ませながら、<6週間目の赤ちゃんが泳ぎを覚えるって、テレビで見たんだけど。ペピ、泳ぎが出来るかしら、どう?>と話しかける。彼がお湯の中に入るや、からだはすばやく強い反応を示した。眼が緊張し、顔が赤らんで、両手の握りこぶしにぐっと力が込められ、腕もまるで自分を抱えようとしているかのような動きを示した。恰も迫害 persecution に直面してもがいているかのような趣きである。彼はからだを捻らせた。母親は<抵抗してるってわけ、どう?>と語りかける。彼は泣きはしない。母親は彼のからだを右手でしっかりと背中を抱えてやりながら、左手のスポンジを使って、とてもやさしげに彼のからだのあちこちを洗ってやる。そして絶え間なく彼におしゃべりを続ける。<いい子ねえ。お風呂が大好きでしょ。そうじゃないの?ほら、ペピ。泳いでごらん・・>。ペピはやがて少しずつリラックスし始めた。実際に彼は足蹴りを始めたり、手をも折々にとても自由に動き回す。まるで

その小さなベビーバスの中で彼は浮いているといったふうだった。そこで母親はくえっ、ほんとに、泳いでいるの？>と笑う。背中はしっかりと抱えながら、彼をお湯に浮かせようとする。ペピはまるつきり平気なふうで、彼の‘水泳エクササイズ’を力強く続行している。まるで蛙がひっくり返って腹を出した恰好で泳いでいるみたいに見えたので、私は思わず笑ってしまった。

Mrs. Pはペピをベビーバスから出した。そしてタオルで包んでやる。それから彼女は彼を膝の上に乗せて、からだを拭いてやる。そしてその後マットレスの上に彼のからだを仰向きにして寝かせた。そして彼のお尻を指し示した。そこには大きな青い班点があった。くほらね、ご覧になって。私がクリニックで最初にペピを受け取ったとき、あらまあ、大変！お尻にぶつけた跡があるわって思ったのよ。だけど、ドクターがこれは‘蒙古班 Mongoloid Patch’だって言ったの。彼が説明してくれたんだけど、赤ちゃんが混血、特に黒人と白人との間の子にはこうしたことが起こるのであって、しかし2,3ヶ月もしたら、跡形もなく消失するというのよ>と語る。われわれが話している間、ペピは何やら落ち着かなくなってくる。顔をちょっとしかめて、哀れっぽい表情を浮かべ、それからぐずり始めた。母親はくお腹空いたのかしら、ねっ、そうなの？>と言いながら、一方でお尻のオムツかぶれを丁寧に見ている。くウム、まあそう悪くはないわね>と言い、それからたくさんのクリームを彼のペニスの辺りにやさしく塗った。ペピは再びおとなしくなってジッとしている。それから彼に上着を着せた。‘Mongoloid Patch’という言葉をももしながら、くこれ迄聞いたことなかったですわ>と私が言うと、く私だってそうよ>と言って、さらに語り始めた。く南アフリカでは、人種法(Racial Law)というのがあってね、もしも赤ん坊にこの青い班点があると、彼は直ちに‘黒人’として登記されるの。父親と母親が白人であってもよ。それにたとえ見掛けがまったくのところ白人であっても黒人の祖母や祖父がいたというわけだね。だからね、南アフリカでは黒人と白人の差別問題というのは大変な事なの>。そして更に、アパルトヘイトの差別について語ってくれた。

その傍らにいて、ペピはだんだん明らかに焦れてきた。ちょっとイライラ泣きをし始めた。そこへ中年女性が何ごとかと怪しむ風情で現れた。そしてくまさか赤ちゃんを殺してるわけじゃないでしょうね。何ごとか起きているのかと見てきたのよ>と言う。Mrs. P.はその同居人の女性Ja.を私に紹介した。それから彼女に《ワインと辛い唐辛子》の事件の顛末を語った。それについて何ごとかをコメントすることもなく、彼女はじろつとMrs. Pを眺めて、く今日は特別スマートな装いじゃないのさ>と言う。Mrs. Pはくあら、有難う>と落ち着いた穏やかな声で応じた。それから彼女はペピを厚手のタオルで包んで、オムツを付けないままで、膝の上に抱いた。どうにかペピは泣き止んだが、尚もぐずり声をあげていた。しかし彼の頬が母親の乳房に触れたとき、静まった。母親がくほら、ほら、オッパイですよ。さあ、飲みましようね>と言うが、彼の口は乳首を咥えそこなう。母親は笑って、くあらまあ、反対側だよ>と言って、オッパイを彼女の手で支え、乳首を彼の口へとふくませてやる。それを咥えた瞬間、すぐさま彼は熱心に吸い始めた。とても力強く！しばらく誰もがじっと沈黙していた。ペピの吸う音だけが聞えた。それから、Mrs. PはJa.にく昨夜ペピの夜泣きを聞いた？>と訊く。しばらく彼女とお喋りをしてから、ペピの耳元にく小さな男の子はここでは泣いちゃいけないことになってるのよ。分かったかな？>と、彼の頬を軽く指でこすりながら言う。Ja.はひと言も言わずに消えてしまう。ペピは5分間ほど何ら休みなしに

飲み続けた。そこで私はちょっと心配になり、<ゲップは要らないのかしら？>と尋ねると、<ええ、そうなの。こんなふうに早く吸う時は、ゲップもあまり出ないの。もしもゆっくり飲んでいたら、空気をも一緒に吸い込むというわけだから・・・。分かるかしら？>と彼女は言う。そこで<ほんとに・・・お腹が空いているのね。ペピのこと‘小さなおしゃぶりさん Little Suck’っておっしゃったけど、今や‘大きなおしゃぶりさん Big Suck’じゃありませんこと？>と私が言うと、Mrs. Pは笑って、ペピに向かって<‘大きなおしゃぶりさん’なの、そうなの？ほんとうだわね・・・>と言って、彼の頬をまたやさしく撫でた。

ペピはちょっと小休止を取った。そこで母親が彼に、<さてと、いちご味のオッパイはどう？こっちはオレンジ味だったでしょ。別のも試してみたいか？>と言って、オッパイを替えた。するとペピは再び吸い始めた。<ほらね、母乳というのはどのくらい赤ん坊が飲んでいたら正確なところは掴めないってことがあるのね、だけど、その顔を見れば、充分かどうか分かるものなのね。もしも充分ではないとしたら、つまり健康ではないとしたら、その表情からして、特に眼の辺りだけど、とても変なの。分かるかしら？人によっては、時間表に従って子どもに授乳するって聞いているけど、それでも充分なお乳を飲んでいて心配するわけね。それで体重計で計ろうとするの。針がどこにあるのかを案じて熱心に見ているんだけど、でも赤ん坊を全然見ていないということになるのね>とちょこっと笑う。<それって言うならば‘強迫観念 obsession’なのね、女性が体重について心配してダイエットするみたいだね。ほんと‘強迫観念’なのよ。>ここで再びスポック博士の育児書に言及する。<もう今日では、彼の考えはすべて間違っていたと言うんだけど。だけど私が自分の子どもを観察してあげると、彼の本を覗くと、あらほんと、ほんとそうだわ。彼の言ってることは正しい！って思うのよ。彼はとても偉大なことを為した人だと思うの、つまりは観察ということ！アメリカでスポック博士にまつわることで何が問題となっているのか知らないんだけど、ちょっと頭傾げているの・・・>と言い、さらに詳細に彼女は語った。彼女はごく最近のことテレビで見たんだとか、なんとスポック博士がこれまで本に書いた彼の考えの幾つかを撤回すると言ってるんだとか。さらには彼が言うには自分が女性の自信 confidence を過小評価していたということも認めてもいたんだとか。<つまりね、女性たちは赤ちゃんに何か問題があれば、スポック博士に駆けつける。そして彼が言うとおりをしなくてはいけないと思う。そうしなければ、罪悪感を覚えるというわけ。それってバカげていない？私は、それってスポック博士の意図したことではまるではないと思うの>。それから私に向かって、彼の本を読んだことがおありかと尋ねた。そこで<ええ、何冊か読んだんですけど。まあ、常識 common sense に溢れておりますわね>と言うと、彼女は大いに喜んで、<それよ、私もそう思ったの。アメリカの人々は、何やら子育てに甘く permissive になってきているのね。何かを失いつつあるの。威厳 dignity とか自由 freedom とか規律 discipline とか・・・ね。それでこう言うわけよ。スポック博士の育児書で育てられた今どきの若者をご覧よ。自己規律 self-disciplined の子どもたちだってさ！それが今ではどうだ、薬物やらアルコールに依存してるってわけだって・・・。だけどそれって、スポック博士のせいかしらって、私は疑問に思うわけ。そう思わないこと？>と語ってゆく。

ペピの吸い方がゆっくりめになってきている。眼もほとんど閉じかけていて、両手をかるく握っている。まどろんでいるようだ。そして母親の右手の指が彼の手に軽く触れられており、ときおりタッピングをして

いる。彼の片方の手が滑り落ちた。寝入ったようである。母親は彼の頬の片方を軽くトントンと叩く。するとペピは再び両手を握り、気を取り直したみたいにオツパイをぐいぐい飲み始めた。Mrs. Pは微笑んで、言った。〈これってよく分からないんだけどね。でもトントンとすることが彼を覚醒させるみたいなの。そうしないと、寝入ってしまうだろうし。もし彼が眠ってしまい、そのまま寝かせたとしたら、おそらくお腹に痛みを抱えることになると思うの。だからね、起こしておかなくちゃいけないの、ほらね、足裏をくすぐると、すぐにも反応があるでしょ、びっくりするわけね〉と言って、それから彼女はそれをやってみせてくれた。〈クリニックの看護婦さんがしたの。でも私、この頬をチョンチョンとタッピングする方がペピを目覚めさせるように思ったの。それもどちらでもなく、片方だけなの。そうじゃないと、どっちの方向に意識を向けていいか分からないでしょ。そうよね？〉と彼を見遣って語りかけた。

ペピの吸い方は吸ったり止めたりと間を置くことが続いた。母親は腕時計をチラッと見て、〈まあそうね、もう充分飲んだみたいね〉と言って、彼を抱き上げて膝の上に坐らせた。ペピはなにやらしばらく遠くをボオーと見ていたようだが、間もなく大きなゲップを2回も立て続けにした。母親は〈いい子だったわねえ〉と言い、それからもっと楽にゲップをさせようと彼を両手で持ち上げ、抱え直してそれから背中をやさしく撫でた。突然に〈なんてすてきな(fascinating)！〉と言って、私に彼の足の親指を示した。それを彼女自身のと比べてみてから、〈これって他の指よりも大きいわね、でしょ？〉と言う。私が〈確かに、ほんとなんて可愛らしいんでしょう〉と言う。それから彼女は、赤ちゃんの爪で自然に取れちゃうって知らなかったわ。鋏で伸びた爪を切らなくてはって思っていたんだけど。でも伸びた爪で取れちゃうのよ〉と言う。彼女は手の中で握っていたペピの手をジッと眺めている。彼女は新しい発見に興味していた。しかし突然、〈ペピ、どうしてそんなに汚い爪なの？お庭で土いじりでもしてたのかしら？〉と笑う。実際、確かに爪が汚れていたの、私も変だなと思う。そして〈不思議ですよ。ペピはまだ鼻をほじくるなんて出来ないでしょう。まるでほんとに庭で土いじりをしてたって感じですよ〉と言って、一緒に笑う。Mrs. Pは、〈おそらく顔を引っ掻くからだと思うわ。皮膚って油っぽいでしょ。だから…〉と言い、私もなるほどそうだと思う。

ペピは母親の膝の上でジッとおとなしくしている、口をちょっと開けたままで、焦点の無い目付きで遠くを眺めている。ペピの眉毛の上辺りに小さな凹みが出来ていた。母親が、〈そんなふうに威厳のある顔が好きだわ。小さなプロフェッサーって感じね〉とペピに言う。私も〈まるで瞑想してるみたい〉と言い、二人は笑った。それから彼女は‘おしゃぶり dummy’と‘指吸い’と言及した。ちょっと肩をすくめて、しかめっ面をした。彼女が言うには、ペピに充分オツパイを吸う時間を与えるならば、‘おしゃぶり’やら他の似たようなどんなものも要らないはずだと思うと、ごく単純にそう思っているんだそうだ。ペピはすやすやと寝入っている。そこで母親は彼を膝の上にやんわりと横抱きにしてあげた。

それから彼女はペピの写真をセミナーの皆さんにご覧に入れるために要らないかと尋ねた。そうすればペピのイメージがもっと鮮明になるだろうからというわけだ。私は〈それはいい考えですわね〉と応えた。それからペピの写真を見せてもらえるかどうか頼んだ。彼女はどこにあるのかを私に指し示したので、

それを私は手にした。そしてペピの誕生2週間目の写真を見ながら、感想を語った。私がMr. Pがペピを抱いている写真を見ながら、〈あらまあ、大きなお父さんとちっちゃな赤ちゃんですこと！〉と言うと、Mrs. Pは笑って〈ほんとだわね〉と言う。私は彼がイギリスにはどのくらいいらっしゃるのですかと尋ねると、〈20年になるのよ！ 私たちは互いに20年も知り合っているの。初めて彼に会ったとき、彼はカレッジの学生だったわけ〉。私が〈あらまあ、ほんと昔昔になりますわねえ〉と言うと、〈ほんとなの。まるっきりね、女性雑誌に載っている恋愛記事みたいなのよ〉と笑う。彼女は自分の言ったことに感銘を覚えたみたいで、やわらかく微笑みながら、なにやら心のうちで考えに浸っていた。〈それで思うのね、もしも20年前に彼と結婚していたらって。そしたらペピは今どんなふうかしらって…〉と語る。その自分の考えにちょっと驚き、大いに彼女は笑った。彼はどこの出身なのかと尋ねると、〈ガーナよ〉と答え、それがどのような国なのかを説明してくれた。それから、つい先日彼の郷里を訪れた際の或る出来事を思い出した。〔或る種の‘洗礼’といった儀式のようだったが…〕魔術師が地面になにやら不思議な粉をばら撒いた。何やら呪文を唱えながら…。それからペピの顔に見入り、どうやらペピの未来を占ったようで、Mr. & Mrs. Pに厳かに‘託宣’をくださったとか。〈この子は逞しくなるだろう…そして両親の老後には、親の面倒を見る子になるだろう〉というわけだ。それから彼女は爆笑して、〈まったくね、もしもこの子がわたしたちの老後、面倒を見てくれるということならば、人気のポップスターとか億万長者にでもならなきゃいけないわね。あらあら…〉とさも可笑しげに語った。

私がお暇をしなくてはと言うと、彼女はペピをマットレスの上に仰向けに寝かせた。私は彼にサヨナラを言った。彼はうとうとしていて、至極満足げであった。母親は彼の頬を軽くトントンと叩いて、〈ほら、笑ってサヨナラって言うのよ〉と言う。ペピはどうやら母親に微笑んだようだった。それからMrs. Pは棚から何かを掴んで私に見せた。それはモビールだった。ストローやらアルミ紙やら木綿の糸やらで出来ていた。とてもシンプルなのだがすてきだった。〈毎週土曜日に女の子が遊びに来るんだけど、この前それを作ったの〉と彼女は言う。そしてそれを天井からぶら下げたんだとか。ペピの眼はそれに焦点を合わせて、その動きを追うということだ！ 母親は、〈どうやらこの子は今や動くものに興味が出てきたみたい…〉と語る。玄関口で、私はMrs. Pに〈どうも有難うございました。さようなら〉と言うと、彼女は〈お越しいただき、どうも有難う〉と応えた。それで次回の訪問がとても待ち望まれたのである。

■第3回目の訪問 ペピ; 8週&2日目 1974/02/12 (5:10-6:15pm)

私はちょっと約束の時間に遅れた。玄関の扉を黒人の10歳ぐらいの女の子が開けてくれた。ちょっと小太りでいかにも気さくな感じの子である。居間に入ると、ペピはマットレスの上にうつ伏せになっていた。裸ん坊である。明らかに入浴を終えたところであったようだ。Mrs. Pは私とその女の子を互いに紹介してくれた。そして〈ペピはずっと泣きどおしなの。外から戻ってきてからずうとなの。それでまずは入浴をさせようと思ったわけなの〉と語る。〈ハロー、ペピ〉と私は彼に挨拶をした。それから、すぐにも彼の変化を認めた。今や彼は丸々とした健康な男の子なのであった！ 先週見た赤ん坊と同じとは信じられないほどだった。だけど、彼のお尻には明らかに先週も見ていたオムツかぶれがあるのを認めた。

そこでMrs. Pにオムツかぶれは良くなっているのかと尋ねた。すると彼女は、<だいが良くなってるわ。ドクターが言うには、心配しないで。たかがオムツかぶれだ。そのうち治るさ・・だって。つまり、子どもによっては皮膚がデリケートなのね>と言う。それから彼女はオムツかぶれ用の塗り薬を示して、それを彼のお尻のあちこちに塗る。それから突如彼女は顔を輝かせて、<あのね、今日、ペピが話しているのに気づいたのよ>と言う。そしてペピの方に振り向いて、<どうぞ何かご意見があれば、来る選挙について何かありませんか・・ウムウム・・>と語りかける。彼はまっすぐに母親の顔を見詰めていたが、それから<アア、アーアー>と始め、それをかなり長い間続けた。お腹をぴくぴく動かして、同時に両手を振り上げ、脚を蹴りながら・・。母親は、彼の‘演説’に聴き入り、<なるほど・・私も同感ですわ！>と応える。私は可笑しくて思わず笑い出してしまった。まるでごく普通の‘会話’そのものだったから。双方ともが互いに実に気脈を通じさせていた(communicative)。事実、ペピは自分が何をしゃべっているのか心得ているといった感じで、まったく自信ありげで、また誰かが自分に耳を傾けていることも意識していた。そこで彼は自信をもって堂々と‘演説’を続けた(選挙について?)。そこで母親はペピに子ども用の歌謡ナースリー・ライムの『Jack and Jill』を歌って聞かせた。傍らの女の子のE.も唱和した。彼は恰も彼らの歌を真似しようとするみたいに、<アア、ア、アー>と力強く嬉しげに続けていた。<他に何かあったかしら?何か思いつかない?・・ああ、そうだわ。こんなのどうかしら?>と、次にもう一つ『Humpty Dumpty』を歌い始めた。朗らかに、そして愉しませるように・・。E.が他の歌を歌った。そこでMrs. Pはそれに唱和した。母親がペピのオムツを取り替えている間、彼はどうやら随分その歌がお気に召したふうだった。まるで<ぼくだって、一緒に歌えるもん・・!>といったふうに、<アア、ア、アー>と喃語を発し続ける。忙しなげに手足をバタつかせながら・・。

それからゆっくりと彼は動きを止めた。そしてしばらく小休止した。それから彼は弱々しげな、いかにも惨めっぽい泣き声をあげた。突然彼の顔が歪み、くちやくちやくと縮む。からだをちょっと振り、そして泣き声が激しくなる。どうやら彼は震えているみたいだ。Mrs. Pは、<寒いのか、ペピ?>と、オムツを付けながら訊く。E.がオルゴール付きのテディ・ベアを持ってきた。そしてペピの耳元でそれを揺する。しかしペピは関心を示すどころではなかった。彼は息遣いを荒くし、泣きじゃくっているばかり。Mrs. Pはペピの上着を手に取り、それを着せてやり、<これって、もうバカみたいなベストよね。誰も買いはしないわよねえ>とか、彼に話しかける。そしてその話を私にする。《Mother Care》というメーカーのベビー・ウエアなんだそうだが、どんなに丁寧に手洗いしてもぼろぼろになるんだそう。それを6着も買ってしまっていたので、仕方なしに、もう誰も買いはしないはずの、どうしようもないのを続けて使っているというわけ。それから彼女は毛糸で編まれた白いショールを手にとって、とても朗らかにE.が赤ちゃんのときのものと語り、それでペピをいくらかきつめにしっかりと包んでやる。それから彼を抱き上げて、腕に抱え込み、<寒いかしら、どう?ドブなお母さんよね。おバカで年取ったお母さん・・そうだわね?ウム?>と言う。この頃には、ペピの泣き声はもうひどく切迫した様子となる。そして母親の腕に抱かれた瞬間に泣き声が止んだけれども、それでも彼はしばらくからだを震わせていた。青ざめた顔色をしている。その眼は幾らか苦悶の色合いを帯び、恰も迫害 persecuted されているかのようであった。彼は大きな息を一度する。それから下の唇をワナワナと震わせたが、それも2、3秒したら止んだ。

間もなく母親は椅子に坐り、ペピも彼女の腕の中に落ち着いたふうであった。その様子はいくらか弱々しげではあったが…。<可哀想に…。寒いね。…大丈夫、大丈夫 (never mind) ! …>と言って、彼女はブラを外した。オッパイが彼の頬に触れるやいなや、ペピは頭を乳首に向けた。もはやジタバタすることなく、実にぴたりと照準を合わせたふうに、彼の眼はほとんど閉じていたわけだが、すんなりと彼はあてがわれた乳首を口の中に咥えた。そしてごくごくむさぼるように吸い始めた。

Mrs. Pは、E. に両親が迎えに来たら、すぐ出られるように、今から手荷物を準備しておくのがいいわねと示唆した。すぐに彼女は立ち上がって自分の手提げを取ってきた。それからMrs. Pは、私に《リビナ》の飲み物はいかがと言って、E. にチズコに飲み物とそれからジンジャー・ビスケットを持ってきてあげると頼む。E. は微笑んで、ちょっと恥ずかしげにハイと応える。Mrs. Pは、<どうもありがとうね>と落ち着いた物腰で朗らかに彼女に言う。

ペピはうとうととまどろんで眠たげであった。そして吸い付きが急速に間欠的になり、どうやら眠りに入ってゆくようであった。彼はもうひどくたびれ果てて、もうオッパイを吸う気力も残っていないかのようであった。Mrs. Pは語った。<実はね週末、夫の姪が滞在したの。彼女は看護婦で、とっても役に立つわけ。例えば、昨晚など彼女はペピのゲップを出すのに手を貸してくれて、それが実に手慣れていてね、だもんだから彼女のお蔭で私たち夫婦は実にぐっすり眠れたってわけなのよ>と笑う。<だけどね、どうもペピは人が周りにいると、ちょっと興奮するって分かったの。そして彼はくたびれていても、眠りたくないって感じになるの。眠気にしきりに抵抗してるわけ。もう実際のところ‘格闘’してるって感じよ>と言い、彼がどんなふうに眠たい眼を閉じまいとして悪戦苦闘していたかを私に示した。そして笑った。<つまりね、彼はすべてを欲しがっているの。何をも見逃すまいとしてるということ。だからくたびれちゃって、それで泣くわけよ。だからもう今日はぐっすり眠ってくれたらいいなと思うの>と語る。

E. が台所から戻ってきた、トレイには《リビナ》の飲み物とジンジャー・ビスケットが山盛りになっているお皿が乗っていた。Mrs. Pは、<まあ、有難う。それでいいわよ>ととても朗らかに、いかにも彼女の振る舞いを褒めるかのように言った。E. はちょっと顔を赤らめ、それから自分の所有物の片付けに取り掛かった。

Mrs. Pはペピの顔を眺めていたが、昨日彼はオシッコをして、顔中を濡らしたという話をし始める。だから彼にもう一つ綽名が出来たんだそう。《P in P》、即ちオシッコ (piss) だらけのペピといったところだ。それを繰り返して、笑いながら彼をからかう。それからペピの‘おしゃべり talking’について語る。<最初にそれを認めたのは、3日前だったんだけど、それで私、夫に言ったのよ。まるっきり‘おしゃべりする犬 (Talking Dog)’ みたいじゃない？>、そして微笑した。

ペピは夢うつつの赤ん坊であった。母親の乳首を口に咥えたままである。母親はゲップを出させるのに彼を膝の上に抱き上げようと思い、乳首を彼の口から抜き取ろうとした。ところが、戸惑ったことには

それはペピの口の中にしっかりと嵌って抜けないのであった。母親はちょっと笑って、手でゆっくりと静かにそれを抜いた。そして彼を抱き上げて膝の上に乗せ、肩越しに立て抱きにし、背中を撫でた。<もう、すっかり寝てしまってるのかしら？>と私が尋ねると、母親は、<ええ、そう・・・だけどコットに連れて行かれて一人にされたくはないの。たくさんの抱っこが必要なのね。それにまだちょっと飲みたくて目覚めるかもしれないわね・・・>と応えた。

E. が突然、壁に貼られた絵がちょっと変でおもしろい(funny)って言う。Mrs. Pはすぐさまそれに反応し、誰がそれを描いたのか、その子がどういうふうにならされたかを物語った。それから彼女は或る話を始めた。彼は5歳の男の子で全然まともに話ができない子で、クラスではいつも遅れがちであった。とっても酷い家庭環境にあって、両親と大きな兄二人でたった一部屋しかないんだそう。ところで、Mrs. Pのクラスでは一匹のトビネズミを飼っていて、週末には喜んで子どもたちは順番に家に連れ帰っているんだそう。或る日のこと、それが彼の番になった。Mrs. Pはちょっとためらいを覚えたわけだが、<もし、お母さんがいって言ったらね>とやさしく言ったんだそう。事実彼女はいいと言ったとかで、彼はそれを自宅に連れて帰った。ところが週明けに母親が来て、Mrs. Pにそのトビネズミが猫に食べられちゃったと報告をした。Mrs. Pがその母親の喋り方をそのままに再現してみせたので、その些か怪しげな話し方がおそらく彼女は精神遅滞であろうと察せられた。Mrs. Pは驚いたが、母親に<大丈夫・・・>と穏やかに落ち着いて彼女を慰めたんだとか。たまたま偶然にも他のクラスの大きい男の子が2人やって来て、2匹のトビネズミをMrs. Pに手渡した。彼らはそれを買い求めたんだけど、母親が家で飼ってはいけないと言うんだそう。そこで彼らは彼女のクラスの小さい子どもたちが喜ぶんじゃないかと持ってきたんだそう。Mrs. Pはひどく喜んで、母親に<ほらね、これって奇跡みたいでしょ。1匹を失くして、2匹を得たってわけのもの・・・>と、改めてもう心配要らないからと彼女を慰めたんだそう。だけど、そのことを子どもらには決して話さないようにと彼女に釘をさした。それはクラスの小さい子どもらにはかなり怖いことだから、聞かせたくなかったんだとか。私はトビネズミ(Jerboa)というのがどんなものかまったく無知であったので、聞いてみると、Mrs. Pは私のためにトビネズミについて詳細を語ってくれた。それがいわゆるネズミ(rats)と似ていると話した後、彼女は、<子どもらの家にはまだネズミが棲み付いていて、それで夜などには姿を現わし、餌を漁るってことがあるの。赤ん坊が寝ているところにもやってくるわけ・・・>と語る。厭な予感が頭を過ぎったので、彼女と私は同時に顔をしかめた。<ほら、U.の地域、あそこはあまりいいところとは言えないわね・・・>と、それに軽く触れた。

ペピは彼女の膝の上に座って、軽く頭を下方へとダランとしていた。ぐっすり眠っているみたいだ。母親が<もっと飲まないの？>と訊く。そして彼を抱き上げて、もう一度授乳の体勢を取った。彼は少しからだをくねらせ、目覚めそうな気配だった。そこで母親は彼にオツパイをあてがった。彼はまるで眠たげであったから、どうしたらいいものやらよく分からないふうだった。母親は彼の口に乳首を咥えられるようにと手を添えてやった。それで彼はどうにか軽くそれを口に掴んだ。そして短くちょっと吸い始め、再びそれを彼は離してしまう。そして、彼の唇は母親の乳首の先っぽにちょっとキスをするような位置に留まった。私は<なんとまあ、無邪気な・・・>と心の内で呟いて、一人微笑んだ。母親は、それから彼を膝

の上に横抱きにし、彼の頭を片腕でやさしく支えた。彼はぐっすり寝ている。なんと健康な、屈託の無い子どもだろう！

Mrs. Pはここで、E. が猿の形をしたビニール製のパターンで遊んでいるのを目にして、アフリカで遭遇した或ることを思い出して語る。或る日、Mrs. Pは5,6歳頃の女の子を2人連れて草原を歩いていた。彼らはちょっと先にバブーンbaboonの家族がいるのを眼にした。突如その内の一匹がMrs. Pたちの方へと駆け寄ってきた。そして女の子のうち一人の髪の毛を掴んだ。それは輝かんばかりのブロンドであり、強い日差しでそれは白色とも映った。バブーンがそれに魅了されたのは確かだ。だが、それはなんともおっかないことであつたから、女の子らは思い切りカナキリ声をあげた。Mrs. Pはバブーンの手を何度か叩いて、女の子の頭から手を引き離そうとした。ようやくそれがいなくなつてから、彼女自身にしても動揺は隠せなかつたわけだが、しかし冷静に、女の子らには、バブーンが友だちになりたいと思つたのよねと語つたんだそう。なぜならば、Mrs. Pはこうしたことで彼女らが動物への恐怖心を植え付けられたら大変だと思つたから・・・だから今でもその女の子らがその話をするとき、彼女は笑い飛ばして、<ほんと、おかしかつたわよねえ>と言うんだそう。しかし彼女が私に打ち明けて言うには、実はとっても怖かつたのよということだつた。さてここで、E. がMrs. Pに自分がしたものを見せた。猿たちが腕と腕とを組み合わさって上手に繋がつていた。<まあ、誰もこんなことしたことはないわよ。すごい！大したものじゃないの！>と彼女が言ったものだから、E. はいかにもご満悦の体であつた。

彼女は突然<この子、重くて・・・>と言い、ペピのからだを支えていた彼女の左腕をさすつた。そして彼のからだをちょっとずらした。<ほんとに重くなつてきてるの・・・>と言い、そして微笑んだ。この頃になると、ペピの左手は頬にあり、恰も顎を持ち上げ支えているような恰好なのである。私はそれってなんだか妙な恰好だと思ひ、<何してるのかしら？瞑想ですかね？>と尋ねると、母親は笑つて、<この子の父親J. はいつも眠つてるときってこんな具合なのよ・・・>と応える。<遺伝ですか？>と私が言うと、彼女は<まあ、どちらもおかしいcrazyつてことよ>とあっさりと言う。それでわれわれは笑つた。それから彼女は、友人から小包みが届いたんだけどね、と語る。それがペピへの贈り物で、珍しい真っ赤な色の赤ん坊の服で、それにピンク系の色の服をも以前いただいてあるんだとか。それで、<まあ、いつかペピに夜の時間帯に着せようかしらね>とユーモアたつぷりに語る。そして今度は或るギリシャ系の幼い男の子について語り出す。彼は自分が赤ちゃんの頃は女の子だつたと信じているんだとか。なぜならば、赤ん坊だつた頃の写真を見たら、自分がフリルやらレースの付いた服を着ていたからと彼が言つたという話。それから彼女が言うには、その子の父親というのは決して男性的masculineなタイプではないんだとのこと。だけどその男の子の上のお兄ちゃんというのが男性的な感じで、母親にベツリなんだそう。そして或る日のこと、その彼が病院にMrs. Pを訪ねてきたとき、産まれたばかりの新生児のペピを抱っこしたくてたまらなさそうにしていたんだとか。それでMrs. Pは、そうした女性的feminineな特徴というのはどのようにしたら育まれるのかしらと頻りに思つたんだという話である。

ペピはぐっすり眠つていた。まったく自己充足している。かすかに鼾をかいていた。彼を煩わせること

などこの世に一切何も無いといった感じだ。母親は彼を抱き上げ、彼を揺りかごにうつ伏せに寝かせた。ペピはからだをちよつとごめかした。彼はしばらく手で顔(もしくは唇)をこすっているみたいだった。両腕の肘でからだを支えて、頭をちよつとばかり持ち上げようとしていた。2,3分ククッと音を発していたかと思うと、やがて静まり、再び深い眠りへと落ちた。

Mrs. Pは、<ペピの物が部屋中に氾濫してるみたいでしょ。何とか片付けなくてはと思うんだけど、どうしようもないわ>と、些か眉をひそめて言う。<Ja. が引越したら、すぐにでもペピは個室が持てるわけだから・・・>と、何とか気分を変えようとする。それから‘キャリコット(携帯用ベッド) carry-cot’ やら ‘抱っこ帯 safety carry-band’ やら、それに車の後部席にキャリコットを固定させる道具類について語った。私が日本の母親は赤ん坊をいつも買い物に出掛けるときなどは、背中におんぶ紐で背負うという話をする。彼女はとても興味を示し、アフリカの母親たちは赤ん坊を腰の辺りにきつい布でがっちりとしばって抱えるのよと語る。

それから私はMrs. Pに日本製の赤ちゃんの玩具「ガラガラ太鼓」を<これ、ペピにどうぞ・・・>と言って、差し出した。彼女はひどく喜んで、どうして使うのかと訊いた。私がそれを揺すってみせると、紐の先の玉が太鼓を叩く音が鳴った。その音がペピに眠りを妨げはしないかと気遣ったが、彼はどんな音にもしくはわれわれの興奮した声にもまるで気にも留めるふうではなかった。Mrs. Pは<まあまあ、ベルサイズ・ストリートに居るどんな赤ん坊だって、こんなすてきな日本製のオモチャを持ってるなんてことありはしないわね。ペピ以外に・・・ほんとうに有難う！>と言った。私は翌週の約束をして、お暇をした。

■第6回目の訪問 ペピ; 11週&5日目 1974/03/08 (4:30-6:00pm)

Mrs. Pは玄関口で私を迎えた。買い物から戻ってきたばかりで、ペピの入浴の準備をしているところだと言う。<それで、夫があなたにお茶を用意してくれてるとこ。彼がいてくれて良かったわ。ペピがね、泣いて泣いて大変だったわけ。なんだと思ったら、まあペピのオムツがもう大変、ものすごい汚れようで・・・。それでね、今私たち全員がキッチンに居るわけなの>と言う。私はキッチンに入り、Mr. Pに挨拶し、ペピが隅のソファでクッションを頭の下にして横になっているのを認めた。なんだかもうひどく惨めっぽい気分のような。一目ですぐさま彼のオムツの中が覗けた。それはゆるくて、いつものプラスチックのカヴァーを付けていなかったから。私は<まあまあ、可哀想なペピね>と言い、彼に近付いた。彼はぐずり声を止め、私を見上げたが、どうやら誰とも分からないふうで、再び弱々しげにクウンクウンと音を鳴らした。私は彼の耳元に<泣かないでね、ペピ。お母さんがお風呂の準備してるわよ。オーケー？>と言って、彼を励ますように彼の手を軽く私の人差し指でトントンと叩いた。彼はその指を手のひらで軽く握りしめた。彼はしばらく私をぼんやりと虚ろな目つきで眺めていたが、すぐに私から眼を逸らし、からだをくねらせて、また泣き始めた。それはまるで、突然それ以前に心に占めていた或ることを思い出したとでもいうようだった。つまり、不快感である。彼は惨めっぽく尚もぐずり声を続けていた。Mr. Pが<ママのことを頻りに求めているんだよ>とコメントした。それは私も同様に感じられた。それはまるで<早く、

マミー！急いでよ、もう気分は最悪だよ。(この汚れたオムツは)もう我慢の限界だよ>とはっきりと述べているように聞えた。母親は、お湯をキッチンから居間へとバケツで運び、ベビーバスを満たすのに忙しくしている最中にも、彼に声掛けを絶えずする。<もうほとほと嫌になっちゃってるわけ？ そうなの、ペピ？ 可哀想に…。すぐに終わるからね。いい？ …ゴメンね、ペピ…いけないママだわね…> Mr. PがMrs. Pに、<オムツ替えてやっちゃったらどうだい？>と声を掛けた。ちょっと心安らかではない。ペピはギャンギャンと泣き喚き始め、その焦れた声は早くしろと催促せんばかりに母親の背に鞭を振る。

Mr. Pは彼の‘朝食’を取りながら、新聞を読んでいた。私はテーブルでペピの傍らでお茶をいただいていた。彼の泣き声をぼんやりと耳にしながら。突如ふと思った。日本では赤子というのはオギャーオギャーとかもしくはフギャーフギャーと泣くということになっている。そこでペピがどんなふうに泣いているのかと知りたくなり、注意深く彼に耳を傾けた。最初はよく聞き取れなかったが、次第にどうやらそれはオギャーオギャーとしか聞えない。<あら、まあだわ。ペピも日本の赤ん坊そっくりに泣いているわ>と内心可笑しく思い、一人微笑んだ。

ここでペピの眼に涙が浮かんでいるのを見た。(それは初めてのことだった。)しかし、涙が頬に流れてるような痕は認められなかった。そうこうしてるうちに、母親はどうか仕事を済ませて、彼を腕の中に抱きかかえた。<ほらほらね。ゴメンね、ペピ。ほんとゴメン。お風呂の準備は済んだわよ。すてきなお風呂が待ってるわよ。オーケーね>と声を掛ける。それからペピが坐っていたところのソファーが(彼のオシッコで)かなり大きく濡れているのを認め、<あらあら、まあ…>と戸惑って一瞬笑った。

母親の胸に抱かれた瞬間すぐに彼の泣き声が止んだ。だけど、なんだかとても不機嫌なのであった。母親は<ごめんね、ペピ>と繰り返していた。<ほらね、お湯をバケツ3杯も運ぶって大変なの。時間が掛かるのよ>と、いかにも言い訳して、彼の許しを請うかのように語りかける。そして<おバカなママだわよね。ゴメンね>を繰り返す。居間へと移り、彼女は彼をベビーマットレスの上に寝かせた。そして彼の上着を脱がせようとする。するとペピは呻き声をあげ、体をよじる。恰も<違うよ、オムツ交換が先だ！>と言わんばかりだ。母親は、彼の抵抗にちょっと困惑し、<でもね、シャンプーが先でしょ。シャンプーって気持ちいいでしょ？ お尻を洗ったあとの汚い水で頭洗うわけにゆかないもの。そうでしょ？>と彼を諭す。そしてすばやく手際よく彼の顔を拭いてやり、シャンプーをしてやった。それから彼女は彼の髪の毛をタオルで拭いて、マットレスに寝かせ、そしてオムツを外した。<おや、まあまあ、どないしましょう。素晴らしい！>と彼女は笑う。ペピのお尻はまったく赤と黄に染まっていた！母親はティッシュを濡らして、それでお尻をきれいにしてやった。どうかペピは静かになり、そのままジツとしている。

私はペピのペニスを凝視していた。その先端にあった包皮が1週間前に除去されたのであった。即ち‘割礼 circumcison’である。(※)まだ先っぽがちょっと紫色である。いかにも痛そうだから、私はつい哀れに思った。母親は<ましになってきてるわ。今日、‘ラバイ’が電話してきてくれて、それでこの(ペニスの周りに)黄色くくっついてるのは塗り薬が乾いたのだから、なんら心配には及ばないって言うの>と

言って、バスタブに塩(普通の台所にある塩!)をパラパラと蒔いて、<こうするとペピのペニスの腫れが癒えるということなのよ・・>と私に説明した。

[※補足;この《割礼の儀式》は、おそらく父方の宗教との絡みであつたろう。詳細については聞いていない。Mrs. Pとしては幾分戸惑いぎみであつたのは事実だ。この手術のあと、ペピが恨めしげにくどうして言ってくれなかったの?どうしてこんなこと、ぼくにしたわけ?>と訴えたという話を彼女が私にしたのがとても印象的であつた。とにかく、麻酔での手術というのではなく、急性の痛み acute pain だから、まだそっちの方がましだということを彼女は私に語っている。それで<とにかく総てが終わって、もうやれやれって喜んでるわけなの・・>とのことだった。(2014/07/20 記)]

さてここですべての準備が揃い、母親はペピを腕に抱えて、ゆっくりとベビーバスのお湯の中に浸した。彼のからだは瞬時に強張った。目は引きつって焦点が合わない。母親が絶えず安心させようとしてペピに言葉掛けを怠らない。柔らかい、やさしげな、朗らかな声で<ほらね、お風呂大好きよね、ペピ。あつたかくて気持ちいいでしょ・・>。そうしてどうにかペピも不安げな緊張した感じを克服し、リラックスし始めた。母親がペピのからだを洗ってあげている間、彼は母親の顔をぐく穏やかな沈黙で長い間ジッとまっすぐに見詰めていた。偶然にも彼は片方の足をかなり強く蹴った、それで水飛沫があがり、私の膝を濡らすところであつた。私は<アジャー・・>と思わず言う。すぐさま母親は、<もう一回、もう一回、やってご覧>と促す。ちょっと興奮ぎみに、彼がこんなことはしたのは初めてだわと言う。そして足蹴りを促す。しかし彼は無反応で素知らぬ顔を決めている。そこで彼女は彼の脚をちょっと持ち上げて、からだを前方へと押し、<ほらほら、もう一度やってご覧・・>と促すものの、しばらくして、どうやら無駄らしいということが解り、彼女は諦めた。

母親はベビーバスからペピを出して、大きな厚手のバスタオルで体を拭いてやり、それからマットレスの上に寝かせた。数秒後、彼はぐずり出し、すぐさま力強く大泣きを始めた。母親は<Vastin>を手に取り、それを彼に見せながら、<ほらほら、見て、見て! Vastinのクリームよ>と言う。だが彼はお尻の塗り薬に興味を持つ余裕はなく、焦れたふうに泣き声をあげ続ける。Mr. Pが顔を出し、<どうなっちゃてるの?>と訊いて、そのまま姿を消した。母親は、彼のペニスの辺りにクリームを塗りたくり、すばやくオムツをしてやった。<まあまあ・・やつとのこと、1分間の平和が訪れたわね>と言って、彼に一匙のビタミン・シロップを飲ませた。ペピはそのスプーンを熱心に口に入れ、一気に飲み干した。母親がそのスプーンを引っ込めると、途端に彼は再び泣き始めた。母親は彼に上着やらベビー服を着せ、<待ってくれないなら、ママはやることちゃんとできないでしょ>と諭す。ペピの泣き声は次第に焦れてどうしようもないほどになる。母親は彼を待たせるのはこれ以上無理と判断し、すべてを終える手間隙を省いた。ポタンはそのままに、髪の毛を2,3回手早くブラシをして、急いで彼を腕に抱えた。

彼女が椅子に座るや否や彼にオッパイをふくませようとする。ペピはあまりに気が焦っていて、飛びついたのはいいのだが、母親の乳首に照準が合わない。母親はオッパイを手で支えて、乳首が彼の口へ

入るようにふくませた。そうすると、どうにかペピはそれを口に咥えられた。そしてゴクゴクと無我夢中で力強く吸い始める。やっと母親は落ち着いて、彼の衣服のボタンを掛けてやった。それから尚も髪の毛を穏やかにやさしげなタッチでブラシをしてあげる。〈P. P・・・P. P〉と、いかにも彼をからかうように囁く。いかにも〈ペピ、おまえはあまりにも早く大きくなるわね。ママはちょっと大変だわ・・・〉と言わんばかりなのだった。そこで、私は〈ペピはすごく健康に見えますねえ〉と言う。Mrs. Pは微笑んで、〈今彼の体重がどうなっているのか、ほんと私、知らないの。そうしたことには関心がないの。先週のことだけど、ペピを予防接種のためにクリニックに連れてゆくことになっていたの。だけど、ペニスに痛みがあるのに、腕にも痛みってのはどうも感心しないと思ったわけ。ドクターは、全然かまわないですよとおっしゃるし、それで延期することにしたのよ。とにかくいつぞや看護婦さんが彼を体重計に乗せたとき、ペピの体重は11オンスだったの。普通だと、赤ちゃんというのは6ヶ月になると、体重は産まれたときの2倍になっていなくちゃいけないのね。産まれたときは6.13オンスだったから、今ではもうほぼ2倍にもなっているというわけね。これからどう成長してゆくのやら・・・〉と言って、とても幸せそうに笑った。それから顔を輝かせ、私にいかにも誇らしげに、ペピが頭を左右に自在に傾げることができると報告した。或る晩のこと、Mr. & Mrs. Pは外出した。Ja. がペピのお守りしてくれていた。彼をコットの中に寝かせておいたのだが、戻ってきてみると、Mr. Pが認めただけど、なんとペピの頭が別の側に向いていたんだとか。それからまた、ペピが揺りかごの中であまりにも激しく動くので、まるで押し潰さんばかりだから、そろそろペピにもっと安全で居心地のいいベビーコットの大きいのを新しく買おうと思っているということであった。

それから彼女は、ペピの睡眠と覚醒の時間帯について語った。スポック博士の育児書によれば、〈赤ん坊を家族の生活のリズムに合わせよう〉ということだから、そこで彼女はペピの授乳時間をこちらの都合にも合わせて注意深く計画したんだとか。例えば、晩にはスプーンで2杯ほどのシリアルを食べさせる。そうするとお腹もちがいいからで、それでペピはずうっと夜中寝ていてくれる。それで朝方には自宅を出る前にペピに授乳をするんだそう。ここで彼女は、4月までは毎週月曜日に学校に出勤することにしたという話をする。ペピと一緒に連れてゆくだそう。おそらくそれで物事がどう収まるのかを彼女は時間をかけて見てみようとしていたのであろう。〈まあ、なんとびっくりよ。朝すべて出掛ける準備が整うのに2時間も掛かるの。ペピに授乳し、ペピの荷物をあれやこれやと車に運び入れるんだだけだね・・・誰か、日中ペピの世話をしてくれる人を探しているわけ。でもこの地域では探せそうにないのよ。まだこれから探そうと思ってる。友達になってくれそうな誰かというのがいいわね。分かるでしょ？ただ単にお金のためにやるっていうんじゃない・・・それも、たとえ赤ん坊が全然好きじゃないのに、なんてことだあってあるでしょ・・・実際のところ、学校では子どもたちがとてもよくしてくれるのよ。クラスで彼らと一緒にいて、ペピを教室の外に置いておくの。それで彼が泣いたりしたら、子どもがね、わたし、行く、行く・・・って、そして誰かがペピのところに行くってわけなの。それでベビーバギーをやさしく揺すってくれたりするのね・・・〉と語る。私が彼女に、授乳はどうなさるのですか、哺乳瓶になさるのかしらと尋ねると、〈うん、まだよ〉と言って、彼女は微笑んだ。それから突然、学校での出来事に言及した。〈私さね、昼食後クラスの中でペピにオッパイをあげていたとき、一人の子が校庭から戻ってきて、私がペピにオッパイをあげているのを見たわけ。それから校庭へ戻って、そこらに居た皆に〈先生のオッパイ、ぼく見ちゃったも

ん・・>と吹聴して回ったもので、それで大騒ぎになったの。校庭中に広まって、そこでたくさんの子どもらが教室の中になだれ込んで来たというわけ。大きな子どもたちもよ！ほらね、大概の子って、母親が授乳しているところなんて見たことがないの、小さな弟やら妹やらがいたとしても・・。それでね、私、校長(head-mistress)に言ったわけ。母親たちから苦情が出るのを覚悟しなくちゃいけませんわねって。そしたら彼女が言うの。母親が赤ん坊にオッパイをあげるのはごく自然なこと。だから、子どもらにとってはとてもいい機会、それで何ごとかを学んだということになるわねって。それでね、私言ったのよ。(教材として)別々の場所でペピに授乳をするのを子どもらに見せるとしたら、どのくらいの報酬いただけますかねって・・>。そして自らの思いつきの冗談を愉快がり、彼女は大いに笑う。

ペピは、まったくのところ吸うことに没頭していた。母親は私に語りながらも、ペピの髪の毛をやさしくブラッシングしていた。彼女は授乳の体勢を変え、もう片方のオッパイを彼にあてがう。すぐさま彼は乳首を咥え、また吸い始めた。彼はとても静かで、落ち着いており、いかにも満足げな面持ちである。それから、徐々に彼の握りこぶしがゆっくりと開いてゆくのが認められた。そしてそれぞれの指が自在にうごめき始めた。‘指遊び’みたいなことが起きている。勿論、意図的ではないにしろ、結構リズムカルであり、見ていてとても魅了された。私はこれほどに愛らしいものを未だかつて見たことがないと思った。

今や母親はペピを抱き上げ、膝の上に乗せ、すぐに坐らせた。彼はしばらくジツとしていたが、それからちよつと顔をしかめた。彼は何か自分の内側で起きていることに気が奪われている様子であった。それから徐々に外界に注意が払われた。彼は私の存在にはさほど関心はなさそうだった。彼はぼんやりと私の顔に焦点を合わせていたが、それからちよつと間を置いて微笑んだ。それは予想外だったので、私には嬉しい驚きであった。そこで<あらまあ、笑ってくれたわ>と言うと、母親は、<そうよ、この子はあなたのことよく分かるようになってきてるわ。そうでしょ、ダーリン？>と、彼に語りかけた。

Mrs. Pは、ペピが壁に貼られてある絵に興味がありそうなのだという話をする。特に或る一枚の、たくさん色に溢れて点々がいっぱいある絵に・・。それってというのは、彼女のクラスのあまり成績のかんばしくない5歳の男の子が描いたんだそうだ。それは私も気になっていたもので、妙に不思議というか、どこかしら悲劇的な趣きがあった。とにかくペピはそれを時折ジーツと凝視している、と母親は語る。そして他にも彼は壁に貼られてある切り紙パターンをもよく見ているようなんだとか。それから彼女は語る。<テレビで、有名なピアニストの母親という人を見たの。彼女が言うには、その息子さんは音楽にとっても小さい頃から関心があったって。だからね、もしもペピが大きくなって有名な画家にでもなれば、私は、ええ、そうですとも・・。彼は‘絵’に誕生後のわずか数週間で興味を示しましたのよって言えるじゃないの。それから、1歳になれば、彼にペイントを与えようと思うのね。それで彼に何か描かせてみるわ。それから、それをいつか\$100の値を付けて売るの。それってどう？すてきでしょ、ペピ？いつか【Tate Gallery】にも連れてゆこうね。きっとそうするわ・・オーケーかな？>と、彼に語りかける。

母親は、膝の上で彼のからだを両腕で支えている。彼らは互いに向かい合っている。ペピはもの静

ながら、母親のお喋りを愉しんでいるかのように、彼女の顔をまっすぐに見上げていた。まるですべての言葉を飲み込むかのように、彼女をひたすら注視している。母親は自分のユーモラスな語りに些か興じて、それにペピが熱心に傾聴してくれていることにも大いに気を良くしていた。彼女は笑い、楽しげにしばらく黙って彼を見詰めていた。それから彼女は幾つか子どもの歌を歌い始めた。私は彼女の即興の歌かと思った。まるで‘喃語’ふうではっきりとは聞えなかったからだが…。とにかく歌詞そのものにあまり頓着しないで、ただ彼女流に、ごく自由に、ペピを目一杯喜ばせようと、私が側にいることもさほど気にせずに、彼女は息子と一緒に時間を存分に愉しんでいるのであった。

ペピは尚も母親を嬉しげに注視し続けている。彼の瞳に輝きが認められた。そして彼の手はそれまではゆったりと握られてあったのだが、おもむろに指が開き、うごめき始める。それはピアノの鍵盤を叩くしぐさにも似ていると思った。それは可愛らしく、またそれ以上にとても優美であり喜悦に溢れたしぐさなのであった。ペピは次第に興奮し始め、力強くブブブブと音を発した。全身が母親と一緒にでなければならないといった意思に充ちていた。それから彼の両腕が少し上向きになり、やがて握りこぶしを上へと突き上げる恰好をし始めた。母親は、<そうそう、ブラック・パワー…ブラック・パワー！そうよ>とペピをちょっとからかうように言う。母親はやや彼の方に腰を屈めていた。ペピの手は彼女の口元近く伸びていった。その唇は絶えず動いていた。彼女は歌ったり、彼をあやしたりしていたから。彼の注意はそこに釘付けになった。しかし彼はそれに手を伸ばそうとしたり触ろうとしたりはしない。ただその口元の周りで大きく振り回している。同時にアーやらイーやらオーやらの音を懸命になって発している。母親は、<オーケストラを指揮してるつもりかな、そうなの、ペピ？>と訊く。なんという楽しげな母子の交わりなのかと思った。彼らは互いに実に献身的ではないか。そしていかにも幸せそのものである。このようにして、それは延々と続くようであった。まるで決して終わりはないといったふうに…。しかし、結局のところ母親は彼を抱き上げて、ソファーへと運び、その赤ちゃん用マットレスの上に寝かせた。われわれが翌週の約束をしている間、ペピはからだをくねらせたり、手足をバタつかせたり、一人賑やかであった。

私は帰途、たそがれの暗闇の中を一人歩きながら、母子の感情が交叉し合うさまを観察した余韻を愉しんでいた。<ほんとに赤ちゃんを持つって、凄いことなんだわあ…>としみじみと心の内で呟く。

■第10回目の訪問 ペピ; 3ヶ月 & 3週目 1974/04/09 (4:30-6:20pm)

私は約束の4時半ちょうどに着いた。フラットの玄関口の辺りのホールにMrs. Pの姿を見た。彼女は両手に抱えきれないほどの荷物を持ち、中へ入ろうと奮闘していた。その手荷物の一つはキャリコットのペピである！彼女は<これ、持ってくださいませんか？>と言って、ペピの毛布を私に手渡した。ペピはちょうど目覚めた頃で、まだ眠たげであった。周囲で何が起きているのか分からずぼんやりしている。彼はからだをくねらせ、手で自分の顔を擦っていた。われわれはフラットの上の階へと階段を上っていった。お天気が良くていいですわねえとやらお喋りしながら…。

居間に辿り着いたとき、ペピは完全に眼が覚めていた。母親はキャリコットの中から彼を抱き上げ、肩にもたれかけさせて、彼の汗をかいた頭をやさしく撫で、<さあ、着いたわよ、ダーリン。いい子だったわねえ。学校でとてもいい子してくれたものねえ>と語りかける。彼女は私のほうに向きを変えて、<そうなの、今日はとてもいい子だったの。実際のところ、今朝一度だけちょっと泣いたんだけど。でもB. (彼女のクラスの男の子)がベビーバギーを揺すってくれて、それでペピはすぐ泣きやんだのよ。Mrs. Nが午後にお散歩に連れて行ってくれたしね。そうだったわよね？>とペピに問うた。ペピはマットレスの上に寝かせられた恰好で、もの静かに生真面目な顔をしていたが、直に彼の慣れ親しんでいるお家に戻ったからか、徐々にリラックスし始め、体をくねらせ足を蹴り始めた。今や彼の手はひどく忙しげになってきた。上にあげたり下ろしたり、振り回したり、顔に触ったり…。彼は軽く握っていた握りこぶし(もしくは指)を口の中へと押し込んだり引っ張り出したりを折々にやっている。その所作は実にもうハチャメチャで落ち着きがない。母親は彼の方に屈んで、笑みを浮かべながら、黙って彼を眺めていた。しばらくして<さあ、お話ししてちょうだいな、ペピ>と言って、何ごとかを話すようにと促した。<アー…アー…アー、ペピ>と語りかけながら…。ペピは母親の顔に焦点を合わせ、明らかに口を大きく開けている。ここ2,3週間に比べるといっそう開いているのは確かだ。実際に彼の舌先が口の中でうごめいているのが見えた。ペピはついにブーブと音を発した。母親はすぐさまそれに反応し、<まあ、ほんと？ そうだと私も思うわ。B. のこと話してるのね？ 彼がいけないことをしたって…？ そう、ほんとう？ ウムウム…>。彼女は、ここで部屋の窓を開けるのにペピから少し離れた。ペピは不満げな声をあげた。そこで母親はまた彼のところにやってきて、<ほらね、ママは手を洗いに行くわね。とっても汚れているでしょ。それからね、あったかいお湯を準備するわね。それでお風呂入ろうね。だから、チズコがお話ししてくれるって。オーケー？>と言い、彼女は姿を消した。

疑いもなく、このチャンスを大いに利用しない手は無いと、私は勇んだ。彼に近付き、彼の傍らの椅子に坐り、おそろおそろ彼に話しかける。<ハロー、ペピ！ はじめまして…>。彼はちょっと誰かなって戸惑ったふうだったが、直に私と一緒にいることは全然かまわないと思ったのか落ち着きを取り戻した。私が彼の手に触れると、彼は私の人差し指を手のひらで握った。私の顔をじっと見詰めながら、とてもご機嫌な表情であった。とてもリラックスしている。私は彼と一緒にハッピーであった。それで彼にちょっと朗らかな、ちょっと高い音を出して、彼に話しかけたところ、彼はビクッと飛び上がった。まあまあ、ゴメンゴメンというわけで、もう一度私は声を低めにして、注意深く、やさしく明るく彼にお喋りを続けた。彼は全然かまわないといったふうだった。それでおそらくもう大丈夫と私も安心し、<あらまあ、赤ん坊を扱うのがうまくなってるわ。たぶんMrs. Pからの影響を受けたんでしょう>と内心呟いた。ペピはごくごくもの静かだ。なにやら生真面目な表情で、とても‘受容的 receptive’というか、私をジッと見詰めたり、天井からぶら下がっているモビールがくるくる回っていたりするのを視線で追っている。Mrs. Pはペピのお風呂を準備していた。私がペピに話しかけているのが漏れ聞えるのか、時折クスクスと笑っていた。

さて、すべてお風呂の準備が出来たようだ。母親は戻ってきて、ペピに屈み込む。彼の頬やら握りこぶしを人差し指でふざけるふうに触り、<さあさあ、お風呂ですよ。お風呂に入るのよね。そうでしょ、ダ

ーリン>と話しかける。それからペピの上着を脱がす。<あらまあ、これ小さくなってきたわね。新しいのを休暇中にぜひ買わなくてはね。それで、もうこの‘バカみたいな上着’は二度と買いませんからって、言わなくちゃね。でしょ？そうでしょ、ペピ。これはサイズ1なの。もうサイズ2になるわね。大きくなってきてるのよね。ペピ、そうでしょ？>と言い、彼をタオルで包む。<まずは髪の毛を洗おうね。汗臭くなっちゃったわよね。もうじきすっきりとして清潔な男の子になるわよ。後で、外に出て、皆に見てもらおうといいわね。‘Belsize’ 界限でこんなに綺麗な男の子はいないって言ってもらえるわね>と語りかける。すばやくシャンプーを済ませて、濡れた髪の毛をタオルで拭いて乾かし、次には彼のオムツを外した。彼のオムツかぶれは此の度はあまりひどくはなかった。母親は裸ん坊のペピを腕にしっかり抱えて、それからバスタブへとゆっくりと浸らせた。<お父さんがね、言うのよ。お風呂の好きな赤ん坊なんて見たことがないって。ここに居るじゃないのよね。お湯が大好きよね、おバカで年寄りのママそっくりにね。おそらく風呂好きなのはママの血筋よ。お風呂の中に一日中居たって全然かまわないの。本を読みながらね。お食事だってするわよ。お風呂の中でコーヒーいただくなんてどうかしら？それ、いつかしようかしらね。どう・ウムウム・>と語りかける。ペピはごくごく安定した様子で、お湯いっぱいバスタブのなかで満足げであった。快の刺戟に満たされていたといえよう。彼は笑っているわけではなかったが、でも彼の顔の表情はとてもリラックスして、口は大きく開けられていた。そのうちに機嫌よく、喉をゴロゴロ鳴らすに違いないと私は思った。彼はここでオシッコをした。バスタブの中にしたわけだが、それには母親は気づかなかった。スポンジをぎゅっと絞って、お湯をペピのお腹の上に掛けてやった。彼を喜ばそうとして・・。それで私は、<あらまあまあ、大変！どうしよう。でも大騒ぎしたって始まらない。(ペピのオシッコだもの) 結局大した害もないわね>と内心呟いた。

母親は彼を抱き上げ、居間のソファへとすばやく運んだ。だが、そこで事前にバスタオルをマットレスの上に敷いておくべきだったと気づく。それでちょっと慌てて、<あらまあ、おバカなママだこと！>と言う。とにかくなんとかそれも済ませてから、ペピをそこへ寝かせた。彼は、母親が彼のからだをタオルで拭いてあげている間中、ごく機嫌のいい顔で母親を見上げていた。だがすぐに彼はクンクンとぐずり出し、幾分尖がった音を出した。<イアーム、イアーム・・>と。それらは私の耳には目新しく、随分といろいろと多様に音域の幅が広がっていると知った。<喉が渴いたのね・・ダーリン>と言って、それから彼女は私に赤ちゃん用カップを指し示し、それを毎日ペピのために学校へ持ってゆくということを語った。彼は日中ずうっと外にいるから、喉が渴くわけで・・。それからやや興奮ぎみに、彼が両手にカップを持って、水を飲むことができるという話をする(蓋に小さな穴が開いていて、そこから飲むわけだが・・)。それから、母親はすばやくペピのお尻にクリームを塗り、次にオムツを付けた。今やペピは白いウール生地の服を着ていた。ピンクの毛糸で縁取りがされてあった。<さてさて、女の子になっちゃったわねえ、ダーリン。これはE. が赤ちゃんのときに着ていたの。誰もがきつと、あらまあ、なんて可愛い女の子でしょう！>と言うわね・・>。彼女はクスクスって笑う。それから彼女は立ち上がって腰を伸ばす。<あらまあまあ。私の腰が・・固まったみたいだわ・・>と言って腰を撫で、ちょっと微笑んだ。

彼女は彼を腕に抱え、それから椅子に腰掛けた。それからペピにオツパイをあてがう。長い間、彼は

ゴクゴク力強く飲むことに没頭しきっていた。それから突如彼は頭を後ろへと回し、まっすぐモバイルに眼を遣った。とても自信ありげで、いかにも自分が何を探しているのか分かっているといった具合なのだ。彼の眼は幾らか輝いていた。まるで<やあー、そこにあつたね！>って感じ。彼は予想したところの物を視界にしっかりと掴んだので安堵したふうだった。そして彼の注意は母親のオッパイへと戻った。しかしちょっと吸っていたかと思うと、またモバイルの方へと振り向いた。彼はこの動作を何度も繰り返した。母親はこうした赤ちゃんの‘ゲーム’にとっても興味を示した。黙ったまま、彼をただ見詰めて、やさしく微笑んでいた。しばらくして彼女が<えっ、何かな？何をぐちゃぐちゃいじくっているのかな？>と言う。どうやら母親の右手とペピの左手とが軽く組み合わさっているのが眼に入った。どうやら指遊び finger-play をしているらしい。はっきりとは私の眼には定かではなかったが、母親とペピは互いに指をぴくぴく動かして、刺戟を送りあっているらしい。10分ほどオッパイを吸ってから、母親は彼を膝の上に横にして抱えた。ペピはすぐに大きなゲップをして、ちょっとミルクを口から戻した。<そう、それでいい！>と母親はペピに声を掛けた。私の椅子のすぐ側にティッシュボックスがあつたので、それを彼女に手渡す。彼女はティッシュペーパーを何枚か掴み取り、彼の戻したミルクを拭き取った。それから再び彼を授乳する体勢を取った。そして別のオッパイを与えた。彼はすぐさま乳首を口に咥えた。そして力強くオッパイに吸い付いている。長い沈黙。ただペピの吸う音だけが…。それからMrs. Pは頭を肩越しに私の方に向けて、<ほら、ちょっと見てみて…>と私に囁いた。顔を輝かせ、音を立てずに笑っていた。そこで私としては一体何が起きているのかと覗き込む。するとそこにはペピの左手が母親の左腕にぴったりとくっついた恰好で、頻りに撫で撫でしているのだ。<まあ、この子ったら、私を撫で撫でてくれるわ。最初、誰かが後ろにいるのかと思ったの>と言い、ニタツと笑う。<ああ、この子が私の腰を撫でてくれるんだったら、いいんだけど…>と冗談ぽく付け加える。私は微笑し、それからペピは自分の髪の毛を撫でたりするのかしらと訊く。すると彼女は<ええ、ええ、しますとも…いつも自分の髪の毛を撫でてるわよ、こんなふう…>と語ると同時に、コットにうつ伏せになっているときなんか、手を頭の後ろにしてね…>と語る。

<もう充分飲んだわね、そうじゃない？>と言って母親はペピの口から乳首を抜いて、それから彼を抱きかかえて膝の上に乗せて立たせた。互いに顔を見合わせながら…。彼女はペピの両方の手〔腕〕を掴んで、微笑し、彼に子どもの歌についてお喋りして聞かせた。ペピの顔が見えなかったので、私は彼らの側の椅子へと移動した。彼の反応をよくよく見るために…。ところが、間の悪いことに、瞬時に私の動きを察したふうに彼は私の方へ振り向いたのである。彼は私の顔をジッと注視し、そのまままったく真面目くさったふうで、でも<あなたのこと、ぼく知ってるよ>といった目つきで凝視している。母親は歌を歌うやらお喋りやら、<ほらほら、モバイルがくるくる回ってるでしょ…>と指し示しながら、モバイルに息を吹きかけてクルクルと回している。ところが、まるで耳が聞こえなくなったかのように、ペピは母親に反応せず、その代わりに私を凝視し続けた。母親はそれに気づいて、<この人、誰だったかな？ウムウム…>と言って、モバイルにまた息を吹きかけて回した。この状況に私はちょっとうろたえぎみで、些か困惑を覚えたので、私もモバイルにひどく興味が動かされたみたいに装い、Mrs. Pと同様にそれを見上げていた。しばらくしてから、もう充分見たとでも思ったのか、ペピは突然私から視線を逸らした。そして幾らか落ち着かないふうで視線をさ迷わせたあと、どうにか我々と同様にモバイルを視界に捉えた。

<さあて、お友だちを見てみようね>と母親は言って、彼を腕に抱き上げ、鏡の前にぴったり立った。母親は、彼が鏡に映る自分の鏡像に向かい合うような位置に彼を抱えている。<これ、誰？ナンだろうね。可愛い女の子じゃないの！（母親はクスクス笑っている）・・ハローって言ってご覧・・>。ペピは何がどうなっているのかさっぱり了解しない。だがすぐに、たまたま彼の眼が鏡の中の自分の姿を捉えた。そして彼は大きく微笑したのである。しかしながら直に彼は戸惑い、もはやそれ以上は直面できずに視線を逸らしてしまう。母親は笑って、<あーあ、なんだかとても混乱しちゃうわね>と彼に語る。

それから彼女は彼をマットレスの上に寝かせたが、突然ビタミン剤を与えるのを忘れたことを思い出した。そこで彼女はスプーンに何粒かを乗せて、それを彼の唇の間に差し込んだ。ペピはそれをすぐに飲み込んだ。母親は彼が両手でそのスプーンを掴もうとするのを見て、そうさせてみる。<そうね、大きな子になってスプーンで食べれるようになれたらいいわね>と言う。ペピは、勿論スプーンが何の為かを知らず、ただそれを握りこぶしで掴んで振り回していた。彼はそれが好きなようであった。しかし母親はスプーンが彼〔彼の顔〕を傷つけるかもしれないと思い、朗らかに<あのねえ、ちょっと・・>と言って彼の気を逸らし、そのスプーンを彼から取り上げた。その代わりに、プラスチックの動物の形をしたものが一束になっている玩具を与えて、それを握らせようとした。彼はそれを手に軽く取った。母親は動物についてお喋りを続け、それらに彼の関心を引こうとした。しかし彼は何やら落ち着きがなくなり、もはやそれには興味を示さない。そこで母親は別の玩具の‘ガラガラ rattle’を取ってきて、<こっちはどうかな？>と言った。だがそれも彼の注意を引くことは出来なかった。今度はティディベアを手にして、そのお腹を押して音を鳴らした。<ほらほら、ティディベアだよ。お父さんが買ってくれたのよね。ほらほら、泣いているでしょ。ねっ、分かる？>と訊く。だが、それも彼の注意を引かない。彼は状況がうまく飲み込めていない。玩具もママの意図も・・。結局彼女は諦め、<あーあ、関心がないってわけね。全然どうでもいいのよね。食べ物さえあれば、もう他はどうでもね・・>と言う。彼女はわざとちょっとしかめっ面をして、ペピの寝床の用意をしに行った。私は内心ちょっと可笑しかった。

しばらくして彼女は戻ってきて、彼を抱き上げ、そして腕に抱きかかえた。背中をやさしく撫でながら、それからゆっくりと彼をうつ伏せにしてコットの中に寝かせた。彼はちょっとクスンクスンと泣き始めた。ほんの少し胸を反らして、頭をあっちやらこっちやらと向きを変えながら。私には彼が眠りに就くのにか落ち着かせようともがいている様子に映った。しかし彼はまるで落ち着かず、彼の両手は、まるでしっかりと掴む何かを探しているかのようで、結局頭の下にあったシーツを掴んで、それを手のうちでくしゃくしゃに丸めた。母親がそれをすぐに直したが、ペピはまた同じことをした。彼は体をよじって、うめき声を出していた。母親は彼をしばらく眺めていたが、それから彼を仰向けにした。そして目の前に母親の顔を認めるや否や、彼女に向けて突然ニコッと微笑した。<あーあ、つまり欲しいものはこれってわけね>と彼女は言い、ニタッと笑う。彼を眺めながら、ふとペピには気が奪われる何かが必要だということなのだ気づいた。彼女はモビールを天井から外して手に取り、それをペピのところに持ってきて、それを示しながら、息を吹きかけてクルクルと回した。それに彼の関心があるということが分かったので、母親はそれをコットの真上にぶらさげ、それを彼が容易にじっとり気の済むまで眺めることができるようにしてあげた。

<やっ和我々もこれで落ち着けるわね>と彼女は言って、私にお茶はどうかと訊いてくれた。だが、私は喜んでとは言えないように思われた。もう直に夕食の支度に入るんだろうと思ったから。だが<J. はとても起きるのが遅いから大丈夫なのよ。全然私がかまわないの。とにかく私もお茶を飲みたい気分だし・・・>と、とつても気さくに私に言ってくださった。私は急いで帰らねばならないわけでもなかったのでそのまま居残った。Mrs. Pはキッチンに行った。彼女と同居人Ja. の楽しげなお喋りが漏れ聞えた。居間で私は、ペピから少し離れたところで、ペピを観察していた。彼の自己刺激的からだの動作を妨げないように・・・彼は一人でも実にハッピーみたいだった。彼の両方の手はあちこち唇だの舌だのを触る。それが快であるらしかった。彼はそれにかかなりの間没頭していた。それから彼は突然クウクウとか泣き出した。そこで私はモビールを突っついた。すると、それはクルクルと回り、ペピは再びおとなしくなった。

ここでお茶が用意された。われわれは椅子に坐った。彼女はすぐさま、私が復活祭の休暇に訪れる予定の‘York’を話題にした。<そちらにお出掛けなのを聞いて、嬉しかったわ。なぜって、私の産まれた郷里はそこから遠くないの・・・>と言い、そしてとても機嫌よく、‘York’で訪ねたらいいと思われる観光地の名前を幾つか教えてくれた。一方、ペピはグジュグジュグずっていた。やがてその泣き声はだんだん焦れてきた。母親は近付いて、モビールを突っついた。すると、ペピはまたおとなしくなった。<まあまあ、大変・・・(育児って)ほんとうに24時間休みなしだわねえ>と苦笑し、椅子に戻った。それから彼女の翌週の休暇のプランを語った。その休み明けの訪問についてわれわれは約束を交わした。ペピはかなり力強くそしてリズムカルにぐずり泣きをしていた。母親は再びモビールを突っついた。それから<ママには分かてるわよ。単に注目されたいというわけよね。それだけでしょ？>と言って、彼をうつ伏せに寝かせた。その後、ペピはちょっとからだをくねくねさせていたが、やがて寝入ってゆくようであった。しかし微かにぐずり泣きの声も漏れ聞える。恰もその声は<ぼく、眠りたいの。だけどダメなの、眠れないよー>と言っているみたいに聞えた。そこで、泣くことで緊張をそんなふうに解放させているんだろうと私は思った。母親は<ほんと、実のところ泣いているわけじゃないのね。別に何かを欲しがっているわけでもないの。自分に自分で語りかけているわけなのよ。アーアーアーとかね。そうしてる間に突然寝入ってしまうの・・・>と、実に自信ありげにそのような説明を私にした。これを聞いて私は、彼女が我が子の育児にいつそう自信を持ってきて、断然ふれなくなってきたといった印象を受けた。

■第17回目の訪問 ペピ; 5ヶ月 & 3週目 1974/06/07 (5:00-7:10pm)

私がドアのベルを押して間もなく、Mrs. Pがすぐご機嫌のいい声でハミングしながら階段を降りてくる音が聞えた。私を招き入れ、お互いにハローと挨拶をした。すぐに彼女は<あらまあ、私の大好きな服だわ。ほんとうに素敵！>と、私が来ていた服を褒めた。私はさほど困惑しなかった。彼女がその布地の柄模様に興味があるのを知っていたから・・・。そこでその珍しい模様についてお喋りをした。

そこに居間からぐずり声が聞えてきた。<やれやれ・・・>と彼女は言い、<ハロー、来たわよー>と部屋の中へと入った。私は彼女の後から続いた。そこにペピがいた。ソファーに仰向きに寝た恰好で、

とても機嫌のいい笑顔を浮かべている。そこで彼の「ずり声は母親への要求だったということ、つまりは、<早く来てよ！一人にしないでよー>といったわけだ。母親は彼に「ほらね、チズコでしょ。今日来るわよって言ってたでしょ、ね」と言う。私は彼からちょっと遠くに居たにもかかわらず、彼はまっすぐに私の顔に焦点を合わせて、とても機嫌のいい顔をしてくれた。殊更私に見覚えがあったとか私のことが好きだとかいうことではないと思われる。私が思ったのは、彼が母親と一緒にすごくハッピーで、だから誰も（何ものも）彼の興奮ぎみの上機嫌を妨げることなどできないといったことであつたろう。その時彼は突然しゃっくりをした。そして2,3秒の間、ちょっと押し黙り、何だろうといった顔つきをした。私がかあらまあ、しゃっくりだわ」と言うと、突然彼は手足をグイと押し上げた（つまりからだジャンプした）。なんだかびっくりしたみたいに…。それで私は自分の声が少し大きすぎて彼を驚かせたのかと怪しんだ。けれども後に分かったことだが、それはいつも彼が興奮を伴う快の気分の時のちょっとしたしぐさなのであつた。

母親はソファの上に坐つた。私に「ペピは今ちょうど哺乳瓶でミルクを飲んで終わったとこなの。それでちょっと遊んでいたってわけ…そうだったわよね、ダーリン」と言い、それから彼女はあくびをし、クッションに凭れかかって、「アアア、アハアハ」と口に手をやって笑いながら、「私、ちょっと疲れたわ」と言う。そして彼女は私に、クラスの子もたちをピクニックに連れていった話をした。ボートに乗り、一時間掛けてテムズ川沿いの公園を訪れたんだそう。<子どもたちは遊んでいたわけ。それで私が子どもを幾人かトイレに連れて行ってる間に、樹の下に荷物を置いていたの。そこに大きな男の子が2人来て、お弁当やらを盗んでいったの。それに或る子の家の鍵もなのよ>と語る。私はただ「まあ、大変！>と言ったまま、けれど事態の深刻さにはまだ気づかなかつた。なんとなく「そんなはずないわよね。だって彼女はあんなに朗らかでいるんだもの…」>と内心思ったから。ペピは頻りに落ち着きのない動作を続けていた。時折自分の服をしゃぶったり、指吸いをしたり、母親の顔に向けて手を差し延べたり…。彼女は彼に微笑を返して、彼の手を軽く握つた。彼女はその事態についてもっと語ろうとしていた。私は言葉を失つていた。彼女がどんなにかそのトラブルに遭つたことで大変だつたらうと思うと気の毒に思い、黙つていた。すると突然ペピがハッピーな、甲高いカッカカッといった笑い声を出して、母親の話を遮つた。彼のご機嫌な声は、われわれの抱える心配とは関係なしに、ただわれわれを笑わせずにはいなかった。母親は彼を見て、一瞬間を置いて、「全然おかしくなんかいないのよ」と彼に言う。私も「そう、とっても深刻ですよ」と相槌を打つ。母親は、「とても悲しい話よ」と言う。でもそう言ったものの、彼からはただひどく嬉しげな喉を鳴らす音しか返つてこないものだから、もはや気分の落ち込んだままではいられなくなり、そこで彼女は「誰かがおまえさんの食べ物を盗んだと思ってご覧。そりゃもう気が滅入るわよ」と彼をからかう。彼女は彼の両足を掴み、その足の先で彼の鼻の上をチョンチョンと繰り返してタッピングした。それでいっそのこと彼は興奮したみたいで、嬉しくてたまらないといったはしゃいだ笑い声を張りあげた。彼女は彼の反応を面白がって、彼に例の鍵を盗まれた男の子に何が起きたのか、その事の顛末を語ってゆく。淡々と、まるでおかしな話を語って聞かせるふうに…。

実際のところ彼女が（彼にそして私にも）語つたところでは、皆で学校に戻り、彼女は彼の住まいまで車で送つてやり、そのの大家さんに預けてあるスペア・キーを貰い受けたのだつた。それから自分用に

彼は新しい家の鍵を作ってもらおうということであった。一方ペピは母親の話を傾聴していた。やたらと腕やら足をうごめかして、時折からだをジャンプしたり、指を口に咥えて吸うやら押し出すやら、もうメチャメチャ忙しいのであった。同時にクックツツやらギャーギャーやらと音を頻りに鳴らしていた。そして時々母親の話を興奮の混じった甲高い叫び声やら笑いで遮った。その度に母親は彼に、<そう、そう・・・>とやわらかな微笑で応えた。そして折々にペピは私の方へと振り向いてはとても機嫌のいいお顔で私に微笑んだ。まるでちょっと彼らの親密さを私に見せびらかすみたいに・・・。<ほらね、ぼく、ママと一緒にハッピーなんだよ>って感じ。彼女がどんな大変な一日であったにしろ、とにかく終わったんだということになる。そこで母親にしてみれば、<だから、まあ、今のこの時間を目一杯ペピと一緒に愉しまなくては・・・>といった気持ちであったのだろうと私には思われた。

母親は<さてと、ちょっとオムツが汚れてないかどうか見ていいかな、どう？>と彼に話かけた。彼の服のボタンを外しながら・・・。ペピは母親をハッピーな顔でじっと見詰めながらクスクス笑っている。彼女はオムツをちょっと覗き、<ウー、臭う！>と言う。それから<バスタオルを取ってくるわね。それからバスルームに行こうね>と言い、彼のからだを抱き上げ、右腕に彼を抱えた。それから鏡の前に連れてゆき、<ほら、ハロー！>と言ってご覧>と彼に言う。ペピは自分の鏡像に大きな微笑を投げた。明らかに彼は、それが何だか分かったかどうかはともかく、それに慣れてきたようだ。母親は黙ったままおかしそうに笑い、そしてバスルームへと向かった。朗らかに歌を口ずさみながら(いつもの彼女のハチャメチャな歌であったが・・・)。タオルやらペピのマットレスなどを取ってきて、ペピをマットレスの上に寝かせ、水道の蛇口を捻り、お湯の中に泡立てる液体を垂らした。それから彼の服やらオムツをも脱がせた。私はちょっと距離を置いて、彼と向かい合って立っていた。それで彼が私の顔に焦点を合わせて、自信ありげに微笑しているのに気づいた。しばらくごく平和なひと時が流れた。バスタブにお湯が流れる音だけが聞えた。<アッハー、臭う！>と、彼女はオムツをはずして、それを傍らに除けた。それから彼のお尻を濡らしたティッシュで拭いた。彼女は立ち上がり、オムツを手にしてトイレに行く、その中のものを捨ててきた。それから水洗トイレのチェーンを引いた。彼女はなにやら戸惑いぎみにクスクスと笑いを浮かべていた。それがどうしてなのかは私にはよく分からなかったが・・・。それからペピに必要なものを取りに出て行った。

私はバスルームの隅に移動し、ペピの頭の後ろから数歩距離を置いて立っていた。私は沈黙していた。ペピはしばらくジッとしていたが、それから徐々に‘私’の姿を探し始めた。彼の眼は右へと左へとしっかりと動いている。それから後ろ向きへ頭を持ち上げた。何も見えなかったせいか、彼はからだを元の位置へと戻した。そして改めて首(頭も)を後ろへとグイと伸ばし、ついに‘私’がそこにいると認めた。視界の中に私を捉えたのである。そうしたややこしい体勢でも、私を穏やかなまなざしでジッと見ている。私は彼に微笑みかけた。実際に彼が見ているのは逆さまの私である。そこで私は彼が混乱を来たすのではないかと恐れた。それで私はちょっと横へとからだをずらし、彼に私の顔が‘ちゃんと’見えるようにした。しかしながら、彼にそれがどう違って見えたのかは分からない。というのは、もうその時点で彼は再び彼の‘からだのエクササイズ’に気が奪われていたのだから・・・。それと指吸いである。それからそのちょっと後で、彼はたまたまオシッコをした。それはヒョイとまっすぐに上へと放射されて、彼のお尻やら足の辺

りの毛布に落下し、ほんの少しばかり彼のお腹をも濡らした。それにはまるで気に留めず、彼は再び指吸いに戻った。しかし間もなくのこと、再びオシッコの噴射が起きた。前のよりもっと勢がいい。彼のお腹を越えて、彼の肩の辺りの毛布に落ちた。それはすばやく、とてもじゃないけど、もう私としては為す術もなかった。母親がそこにうまい具合に現れ、これを目にした。私はくまたやっちゃったわ>と、些か困惑の体で呟いた。彼女は笑って、<もうオシッコだらけ・・。ほんと、どこもかしこもよ。(この家には)聖なる場所なんて一つもないわけ・・>と苦笑した。それから彼女はバスタオルを掴んで、彼のお腹に覆いかける。オシッコの噴射が彼の顔に掛からないようにと。彼女はクスクス笑い、彼に<ほら、やってご覧、もう一度・・もうすっかりオシッコ終わっちゃったわけじゃないでしょ>と言う。ペピはごく落ち着き払った顔つきで指吸いをしている。無反応！そこで母親はタオルを彼のからだにそのままにして、他の必要な物を求めにまたいなくなった。徐々に彼はタオルに興味を持った、それを自分の手のひらで掴み、引っ張ってそれで自分の顔を覆った。それからまたそれを引っ張り、自分の顔からそれをどかした。いくらか落ち着きのない動作が続いたが、やがて彼はそのタオルを口に入れ、噛み始めた。母親がやってきて、彼の傍らに座った。<さてさてと、赤ちゃんは6ヶ月でお座りが出来るんですって。ほらね>と、彼の両腕を抱えて、彼のからだを支え、しっかりと座らせた。しかし彼女が腕を離すと、簡単に彼のからだ片側へコロと傾げた。ぼかんとした目つきである。母親は大笑いして、<あーあ、もうガッカリよ(You old fool!)>と言う。改めて彼女はもう一度やらせてみる。今度は彼女の目つきに真剣味があり、彼の身体的発達について注意深く観察をしている。一方でペピはまったく他の事に気が奪われていた。母親が彼のからだを支えている間、彼の手がたまたま壁側に掛けられてあったタオルに届くまでのところに近付いた。彼は俄然それを手で掴んでものにしようと決意を固めたかのようにであった。だが空振りが何度か続き、今ひとつ掴めない。その一方で、とにもかくにも母親は彼をどうにか安定したお座りの体勢を取らせることが出来たようであった。だが、彼女が支えた手を離すと、その瞬間に彼のからだはバランスを崩した。何ら抵抗することもなしに、彼はころんと横へと転げてしまう。母親は思わず笑って、<あーあ、私のちっちゃなハトちゃん、可愛い子ちゃんね(You dove! My sweet heart!)>と言う。

彼女は彼のベストを脱がせた、<これ、木綿のベストね>と呟きながら・・。そしてペピに向かって、真面目な顔で<ほら、ペピ、見てご覧。木綿のベストよ>と言い、そのラベルをしばらく見ていた。それから静かにペピを腕に抱えて、ゆっくりと泡立ったあったかいお湯の中へと沈ませた。彼はどうにか穏やかに満更でもないふうだった。母親はペピに<ほら、お座りしてご覧>と言い、それから<今度は横になってご覧>とクスクス笑いながら声掛けをする。彼のからだの上部をしっかりと腕で支えながら、彼女は彼を水の中で前進させ、また後退させ、それを繰り返した。彼はそこそこ浮いている状態にあり、泰然としている。明らかにお湯を愉しんでいる。その一方で彼の洗髪は済んだ。母親はスポンジで軽く彼の髪の毛を撫でただけ・・(泡だったお湯で濡らしてだが・・)。再び彼女は彼をお湯の中で座らせようとする。<さあ、お座りしてご覧>と語りかけ、彼の身体位置を注意深く吟味していた。徐々に彼の手はゆるく開き、活弁になった。どうやらお湯を掻き回しているようだ。すぐさま、彼はお湯の表面を手で叩くことを愉快と察したらしい。偶然にも水飛沫があがった。大きな水飛沫であった。母親はそれをひどく面白がって<水飛沫だね。さあ飛ばしてご覧>と彼をもっとその気にさせようとする。ペピは、まさに母

親の指示を待っていたかのように、すぐさま水飛沫をまたあげた。大きな水飛沫である。(なんてうまく互いに気脈が通じていること！)それから彼は腕を振り上げる動作を続けた。彼はもしも水の面を激しく叩きつけたら、どういう結果が生じるのか、好奇心をそそられているようであった。

母親は、彼をバスタブから出し、マットレスに寝かせ、それから彼の濡れたからだを拭いた。彼は穏やかで、まったくのところ満足げであった。彼は母親の顔を熱心にひたすら凝視し続けている。母親は突然呟いた、<年寄りでおバカなお母さんよね。重荷になるかしら？お父さんだって年寄りのおかしな人でしょ。(彼女はペピに訊く)・・おまえさんは障害を抱えた子ども a handicapped child ってことになるわけかしら？> 私は、彼女の言葉がとてももの哀しく聞えた。何かしら心に痛みを覚えた。母親はペーパーパウダーを彼のお腹の上に振り掛け、それで手で擦り、それから背中も同様にした。幾らか心が奪われている[何ごとか彼女の心のうちで思いが駆け巡っているであろう]。ペピはハッピーな気分のまま、ひたすら母親を熱心に見詰めている。ごくごくゆったりと満足げに鼻をかきながら・・。母親はニタッと笑って、彼の上に屈んで、額にキスをした(大きなキスであった！)。ペピはこれにはひどく喜んだ。喉を鳴らして、からだを大いにくねらせる。そこで母親はもっと熱狂的なキスを彼の顔じゅうにしてやる。まるで彼に対する愛情が抑えることのできないほどに溢れんばかりであった。その一方で、彼の注意が母親から逸れた。それは彼女の耳飾りで、ちょうど彼の顔のごく間近にあったのだ。今や彼はそれに夢中となり、何とかしてそれを掴もうと手を伸ばす。やがてどうにか手の内にして、それからそれをグイと引っ張った。母親は、彼の額だけではなく、頬やら首の辺りやらとキスすることに熱中していたので、それには気づかずにいたのだが、ようやく何が起きているのを察した。[彼女はピアスをしていたのだ。] ペピは手のひらでその耳飾りを思い切り引っ張ろうとしたので、母親は首を持ち上げることが出来ずにいた。それで<だめ、だめ、だめよ。引っ張らないでね>と言い、クスクス笑いを大いにして、結局のところなんとか彼の手を耳飾りから離させた。それから彼女はペピの顔を黙って眺めていたが、何やら顔にはおかしさが浮かんでいた。それから彼女は彼に尋ねる。<ママっておバカさんかしらね。そう思うの？もう、グチャグチャしてないで、さっさとやることやってよって言うてるのかな。そう？> 彼女は新しいオムツを手に取り、それから呟いた。<私はちょっとクレージー-crazy かもね。お父さんもそうよ。立派なクレージー！だからね、おまえさんもクレージーになるわね。私のお仲間(my friend)というわけよ！>

彼女はオムツ交換をし始めたところだったが、ペピはほんの少しオシッコした。母親は微笑した。この時点で、同居人のJa.が中に入ってきた。皆<ハロー>と挨拶した。周りを見渡し、何やらペピをからかう。いつものハスキーな声音でコメントを加えた。<まあまあ、たくさんの女性群だこと！からかったり甘やかしたりだわねえ>と言う。母親が<ほんと、その通りよ>と応える。それから彼女らは一緒にごく個人的なことを話題にする。ペピは静かにしていたが、一方で腕やら脚があちこち頻りにうごめいている。それから偶然彼の指が自分のペニスに届いた。実際それに何度か触ってみたが、どうにもはっきりしない面持ちである。それで指吸いへと戻った。Ja. が彼に言う、<鼻しているじゃないの。あーあ、もうバカみたいじゃない！ペピ、いい？よく聞きなさい！おまえさんの問題はね、あまりにも注目を浴びすぎていることなのよ。チズコがメモに、こんなに甘やかされている子なんて見たことがないって書いてるわよ

>と言う。彼女は己れのパフォーマンスに得意になっている。ペピが彼女の方に向かってしっかり傾聴していたから。。彼女はニタツと笑うと、もう充分といわんばかりのゼスチャーをして引き取った。その後で母親が、<コココーラと同じ色だわねえ。ほんと、そうよ>と言う。何のことかと訝しく思ったら、それは彼のオシッコの色のことなのだった。彼女は同じことを繰り返し、オムツ替えの準備をしていた。一方でペピは彼のペニスをここでしっかりと意識し始めた。<何かあるぞ、ちゃんと触って分かるもん。。>といった感じである。彼はそれに手を伸ばして、それをもてあそび始めた。だけど、自分の眼で手が何を掴んでいるのかを確認しようとする事はなかった。母親はこれを認め、<あれ、何してるの？>と言った。とても穏やかに、しかし明らかに彼の発見に興味を覚えた様子である。<自分で自分をもてあそんでいるってわけね。(少し間を置いて)そうなの？自分のからだを発見しているのね、男の子か女の子かどっちかなって。。そうなの？>と問いかける。それからどうやらオムツ替えは済ませ、<ほらね、隠されちゃったから。もう(ペニスと)遊ぶことできないわよ。ごめんね！>と言い、お尻をトントンとからかうふうに叩いて、クスクスと笑う。

それから彼女は彼の上に屈みこんだ。ちょっと間を置いて、彼女はおかしな音を奏でた。<バーバーブー>といった感じだ。それを彼女は繰り返した。ペピはクスツと笑った。<じゃ、これはどうかな？>と言って、母親が今度は人差し指を口の中に突っ込んで、それをポンと抜いた。ペピは喉を鳴らして喜んだ。そこで再びそのポンという弾んだ音を同じようにして奏でた。その後、彼女は<ミャーオー、ミャーオー>と言って、ペピに<これ言えるかな？どうかしら？やっでご覧。ミャーオー、ミャーオーって。。。>と促し、彼の反応を待つ。驚いたことに、彼は勢いづいて尖がったハイピッチの声で、すぐさま喃語めいたバウバウのような‘お話’を始めたのであった。母親は、<そうよ、それでいいの。じゃ今度はこんなのはどうかしら？>と動物の鳴き声を物真似し始めた。その度に、彼女はペピからの反応を得た。クウクウやらクスクスやら、時には高笑いやら。。

それから母親はペピの寝間着を手に取り、それを彼に着せ始めた。そして間もなく彼女は朗らかに子どもの歌を歌い始めた。<I had a little nut tree; nothing would it bear (私ね、一本の小さなナツメの樹を持っていたの。でも、何も実なんか生りっこないわ)。。>。とてもはっきりと歌詞を歌い、それを3回立て続けに歌った。彼女の顔には微笑があった。だが、彼女が徐々に何か他のことに気が奪われてゆくように感じられた。ペピの毛髪に櫛を入れ、彼を腕にひよいと抱き上げ、やがて皆で一緒に居間へと移動した。<さあーて、おやかんでお湯を沸かさなきゃね。シリアルを作ってあげるわね。オーケー？チズコとお話してるのよ>と言って、キッチンへと去ってゆく。

ペピはお座りしていた。ソファでクッションに凭れかかりながら。。私はその彼からちょっと距離を置いて椅子に腰掛けていた。彼と向かい合って。。私は沈黙したままだったが、彼は私の存在をはっきりと意識していた。彼はしばらくの間は大丈夫だった。部屋の中を見渡し、そして指吸いをしながらご機嫌でいた。だが、突如その顔に何やら悲哀感を漂わせた。クスクスと泣き始めるかのようだった。私の方をジッと凝視しながら、恰もママがいなくなっちゃたって私に訴えているかのようだった。そこで、私が

<大丈夫よ、ペピ。そうでしょ？大丈夫よね>と声を掛けた。すると途端にまるで気を取り直したふうにしやんとになり、もう何も悩むことはないといわんばかりに指吸いを始めた。それからほんのしばらくすると、彼は退屈し始めた。そして何かがナイということが感じられた。彼は<オッーエ>と呻くような声をあげた。哀しげに私の方を見た。そこで私は<大丈夫ね、ペピ>と繰り返した。そこで彼はまたおとなしく指吸いを始めた。だがまたしばらく後に、突然顔を大きく歪めて、シクシクぐずり泣きを始めたのである。そこで私が、<分かるわ。ママに置き去りにされちゃたって思うのね。それで気が動転しているわけなのね？>と語りかけると、驚いたことに彼は直に幾らか落ち着きを取り戻したのであった。彼の反応が面白くて、彼を注意深く眺めていた。母親とJa. とが台所でお喋りしている声が漏れ聞える。私は母親がペピのためにシリアルを作るのにいつもよりも時間が掛かっていると感じていた。ペピは落ち着きを失い、顔を赤く力ませた。恰も<もう限界だよ！>と訴えているかのようで、彼は弱々しげにシクシクと泣きじゃくっている。私は<ママに見捨てられたって、それで怒っているのね。でも大丈夫だから。もう直に食べ物と一緒に戻ってきてくれるわよ。そしたらもう大丈夫ね>と話かける。私は彼に語りながら、妙な気分だった。ほんとうに私の言っていることが彼に通じているなんてことがあるかしらって…。私としては確信を持てなかった。私は彼に尋ねた、<オモチャ、要るかしら？>と。だが、どんな玩具も彼の注意を引くということはあるそうになかったので、何も行動には移さなかった。シリアルがもう出来上がっていないはずはないと思い、早く母親がやってきてくれたらいいのにと、私は願わずにはいられない気分でした。

この間、私は或る出来事を思い出していた。それは前回の訪問の際のことで、1週間前のことなのだが、その日、実に興味深いことが起きた。私の約束は昼の12時であった。私がほんのちょっと遅れて到着し、玄関のベルを押したが、反応がない。為す術もないので、そのまま待つことにした。するとそこにMrs. Pが私の後ろから駆けてきた。彼女は美容院に行ってきたらしく、帰宅が遅れたみたいだ。ペピのことを案じて、<ペピが私のこと、ひどく怒ってるに違いないわ>と言う。彼女はキッチンへと抜き足差し足で向かった。‘いけないお母さん naughty mummy’って気分なのであったろう。すると、そこには押し黙った、不機嫌な2つの顔があった。J. は夜勤明けで疲れ切っていたので、もはや挨拶をする元気もない。ペピは彼の膝の上にあった。哺乳瓶でミルクを飲んでいて、彼はチラッとわれわれを(母親と私)を見たようであったが、何ら喜びを表すことはなく、ただ黙々とミルクを飲み続けていた。母親は、勿論のこと、この困難な状況を彼女のいつもの朗らかな調子でどうにか切り抜けようとした。しかし事態は楽観的ではなかった。実際に、彼女がペピと繕いを戻すにはかなりの時間が掛かった。私が彼らと一緒に居た時間に限って言えば、彼女は結局のところ、この日ペピからいつもの‘魅力 glamour’を引き出すことは出来ずに終わった。(私が覚えている限りでは、食べ物と入浴の後にほんの少し弱々しげな笑みしかなかった。)私は、ペピの母親に対する、実にそっけない(remote)、無関心ともいえる態度に大いに恐れおののいた。彼女の方もまた、罪悪感を覚えていたわけだから、彼に<ママのこと、まだ怒ってる？>と幾度か尋ねざるを得ない気分であった。母親が彼のニーズを充たすことに失敗したからといって、罰を与えられねばならないと彼が思ったのかどうか、そんなことがあるだろうか？私は彼の心の内でいったい何が起きているのかを知りたいと思った。そしてその後でもう一つ、彼について面白いことが分かったのだ。

ペピがコットの中で眠りに就く前に、母親が彼に幾つか玩具を示した。そして母親にとって（私にも同じだが）驚きでありかつ面白がらせたことは、彼が‘好き嫌い’のはっきりとした2つの異なる反応をしたということだ。彼は好き liking だという反応をする場合、熱心に嬉しげな声をあげ、ジッと見詰め続けた。そうではない場合には不平を鳴らすかのような声を、そのオモチャが引っ込められるまで鳴らした（この間ずうっと穏やかで、幾らか受容的な態度を取り続けていたのではあったが・・・）。そこで私が得た結論とは、母親が不在の折、ペピは父親と一緒にあったわけで、彼はペピのオムツを取り替え、そして哺乳瓶のミルクを温め、彼に与えたというわけだ。だからペピがひどく欲望を阻まれていたともいえまい。しかし彼はそれが彼のニーズを充たすべき満足な状況ではないと感じたに違いない。それに或る程度、その欠落している〔彼の真に欲しいもの〕とは何であるのかを意識していたに違いないということだ。

さて、ペピは弱々しげにシクシクぐずり泣きをしていた。私はくお母さんは直に戻るからね・・・と折々に声を掛けていた。そしてとうとう母親がシリアルを手に戻ってきた。そして明らかに沈んだ声でくごめんなさいね・・・ちょっとお喋りしてたの（ピクニックでの不祥事について）。お金が盗まれたの・・・と言う。私は息を飲んでくまあ、お金もですかと言う。彼女は急いで、くいやいや、私たちの落ち度だから・・・と言って、幾分ペピに笑いかけた。私は沈黙した。どう言えばいいのか言葉が思いつかなかったので・・・。さて、彼女はペピを膝の上に抱え、シリアルを掻き混ぜ、そしてスプーンで彼にそれを与えた。ペピは呻き声をあげた。つまり拒んだのである。くこれ、ぼくの欲しいもんじゃない！>というわけだ。母親は、くほらね。食べてご覧・・・とシリアルを勧めたが、ペピがそれを受け入れるつもりがないことは明らかだった。そこで母親はそのシリアルのパールを脇にどけて、オッパイを彼に与えた。ペピは俄然勢いづいて乳首に食らいつき、力強くゴクゴクと飲み始めた。彼の手〔指〕は落ち着かないようすでくねくねうごめいており、母親のオッパイの周りをまるで絵を描くように揺らいでいた。どうやら手のひらで彼女の着ているブラウスを掴み取り、それを引っ張ったり引っ掻いたりしている。それらすべてが同時進行であった。母親は彼の落ち着かない手を一つ、自分の手の内にとり、人差し指で撫でたり軽くトントンと叩いたりしているのであった。平和な静寂さが漂う。ペピのオッパイを吸う音やら呼吸する息遣いだけが聞えた。そこに突然、くアッ、痛い！ 噛んだわ・・・と母親は穏やかに言い、ちょっと微笑した。

それから少し経って、彼女は膝の上に立たせる恰好で座らせ、そして口にシリアルを入れたスプーンを与えた。今度は何ら嫌がらずにペピはそれを飲み込んだ。徐々に自分で食べようとする動きが顕著になる。スプーンを自分で握ろうとする。が、手やら顔やらも汚してしまう。母親はそれらを拭きとってやり、それからもう片方のオッパイを彼に与えた。すぐに彼はそれに気持ちを切り替えて、まったく吸うことに没頭した。徐々に彼の左手が、母親の右の腕〔ブラウス〕を掴んでいたのだが、緩くなって、それからゆっくりとダラリと下へ落ちた。彼はぐっすり眠っているようだった。それでも彼の吸う音が断続的に聞えていた。（彼の顔を私は見ることは出来ないのであったが・・・。）私は母親に囁き声で訊いた、くまだ吸っていますの？>と。母親は、くええ、2,3分ごとぐらいに・・・>と応え、微笑んだ。そして長い沈黙が続いた。殊の外静かである。彼の和やかでリズムカルな鼾の音が私に眠気を催した。そのとき母親が静かにくこの子、実際には吸ってはいないの・・・でもどれほど吸っていてもかまわないの。もしも止めさせたら、

同じよ、きっと(自分の)指を吸うに決まってる。でしょ? >と言う。

彼女は、彼を見て、もうぐっすり眠りに就いていると確信した。彼女は彼を抱き上げ、両腕に抱え直した。ペピはちょっと体をもがいたが、何とほぼ同時とっていい程に彼はヒョイと自分の親指を口の中へと咥えた(彼の眼はしっかりと閉じられてあったのだが・・)。それから頭を母親の肩に乗せた。そのまま彼を立て抱きにした恰好で彼女は寝室へと向かう。私は戸口に立っていた。それから彼女は私を差し招いた。<ほらね、ここにウサギさんがいるでしょ>と言う。彼のコットには、小さなぬいぐるみのウサギさんがいた。そしてペピはそのウサギさんの首元のリボンを手のひらに握り、時折それをモジモジといじっていた。母親は私に、<いつも私、これをこの隅に置いておくんだけど。翌朝にはいつもここじゃなくて、それとは反対の隅に置いてあるのよ>と明るく笑う(声を出さずに・・)。突如ペピは起き上がった。そして頭を私たちの方へ向けた。明らかにうとうとしていたのだが、彼の眼は大きく見開いており、しっかりとハッピーな笑顔をわれわれに向けていた。1分ほど・・。そして突如としてガクンと彼の頭は落ち、うつ伏せに寝かせられた恰好に舞い戻った。しかしその1,2分後、またまた彼はムクッと起き上がり、われわれの方を見遣って、しばらくともご機嫌のいい顔をして見せた。それからまた彼の頭はガクンとコットの中へと沈没した。われわれはクスクス笑っていた(声を出さずに・・)。私は彼のコットから数歩退いた。そして母親は彼を布団の中に押し込んでやり、<お休み、お休みね。ダーリン！お眠りね・・>と声を掛け、コットから身を引いた。ところがすぐにまたもやコットから微かにぐずり声が漏れ聞えた。彼女は身振りで、<あら、もういや。もうたくさんだよ。今日のところはもうあなたは要らないのよ>という具合に彼の方に示して見せた。私は部屋の外へ出、もう笑いを堪えきれずにいた。母親もクスクス笑って、<まあ、まあ、まあってとこだわね>と言う。次回の約束を取り付け、私はお暇した。なんだか少し眠たかった。

[**補足;ペピが6ヵ月半の頃(1974/07/02)、こんな報告があった。彼が‘ずる賢く cunning’なってきたという話！つまり記憶力の芽生えとともに、好奇心を伴う探索行動が顕著となり、いわゆる‘悪さ’をしないとも限らず、だから眼が離せなくなってきたというわけだ。例えば、居間で父親がTVでフットボールの観戦に夢中になっている間、ペピはカウチに座っていた。傍らにあったチョコレートに手を伸ばし、それを掴み取り、それから包み紙をどうにか破いたらしい。それで顔やら手やらをチョコレートでベタベタにしていたんだとか！勿論チョコレートの味見は存分にしろが・・。これ以降、7ヵ月半頃には食べ物ならば何にでも興味を募らせてゆく。目敏く見つけ、隙あらば手当たり次第に掴んでは口へと持ってゆこうとする。と同時に、お座りして玩具を相手に一人遊びに興じる時間が増えていった。目と手指との協応動作が目覚ましくスキルフルになってきている様子が覗かれた。(2014/07/20 記)]

[***補足;夏季休暇のため3週間、ペピの観察はお休みとなった。その休み明けに訪ねた折(1974/08/28)、ペピの私への反応は実に劇的と言えた。彼は私をチラッと見るや、途端に不機嫌そうなかめっ面をした。私が彼の方へ一歩近付くと、彼は唐突に大泣きを始めた。まるで恐ろしげなものを目にしたみたいに、恐怖で慄いている。この私への‘警戒態勢’は緩まず、尚もしばらく続いた。ペピは8ヶ月半になっていたわけで、これがいわゆる‘人見知り’だと判っていても、いつの間にか自分が

‘闖入者’になったみたいで、私の心は微妙に揺れた。一方で、彼の成長はめざましく、探索行動はいつそう多彩になり、玩具に限らず、キッチンにあるものは何でも鍋やらゴミバケツがペピの遊びの対象となる。また発声面でも勢いづき、‘一人お喋り’も大いに活発となる。父親と母親の会話にも喃語を発して割り込むやら、<ぼくも！>といった自我意識が嵩じてゆく様子。自分の要求をゼスチャー（声音やら身振り）で積極的に伝えようとする。自分を訴えるすべを実に心得ている。父親との語らいも日増しに増えてゆく。食欲は依然として旺盛であり、寝返りもうまくなる。（2014/07/20 記）

■第26回目の訪問 ペピ; 9ヶ月 & 2週目 1974/09/27 (4:45-7:05pm)

玄関の扉が開いていたので、私は中へ入った。扉を閉めたすぐ後で、Mrs. Pが私に<ハロー！>と呼びかける声が聞えたが、どこにいるかは分からなかった。それで<ハイ！どこにいらっしゃるの？>と訊くと、<ここよ>と声が返ってきた。キッチンであった。母親は、<玄関の扉を開けておいたのよ>と私に言う。（帰宅したばかりなのだろう。）そして、<あらまあ、とっても明るくcheerful見えるわね>と付け加えた。私がかかなり派手な赤のレインコートを着ていたからだ。ペピは床に座っていた。私の方にわずかに体を向けて、<一体全体今頃誰がやってきたんだ？>といった感じ。私は一瞥して、彼がちょっと緊張しており、神経質でいくらか怪しむふうな表情を顔に浮かばせるのを認めた。どうやら私は歓迎されてはいないらしい。どちらかという侵入者といった感じか。そこで私は母親の言葉に乗って、<いやいや、そうでもないんです。なんだかうんざりした気分なんですよ>と言って、手荷物を置きながら、朗らかにこのじめじめ湿気が多い肌寒いお天気について愚痴をこぼした。そしてどうにかペピの近くの椅子に腰を掛けた。私はすばやく彼の方に視線を投げ、今やちょっと気分が穏やかになっているのを認めて、安堵した。<まあ、あなたが一緒に居ても、ぼくかまわないからね>といった感じ。そこで私は彼に<ハロー！>と大きく笑いかけて挨拶をした。彼は私を見上げる恰好で眺めていたが、まだどうも内向きである。（この時点で、ペピは私にとってはどうも‘脆くて壊れやすい魂’といった感じなのであった。恰も私がかもう一步踏み込めば、カナキリ声を張り上げるんじゃないかといったふうな趣きなのだ。私は、<あまりかまわないほうが良さそうだ>と心の内で思い、意図的に彼から注意を逸らした。母親は私にお茶はどうか、《リビナ》がいいかしらと訊いてくれた。私は《リビナ》をいただくことにした。母親は、そうよね、この寒さだから、それがいいわね。それじゃ、皆一緒にあったかい《リビナ》を飲みましょうと言う。彼女は、ペピにも話しかける。ごく気さくに朗らかに…。彼は手に何も遊ぶ道具を持っていなかったので、床のカーペットをむしり始めた。母親はそれを遮って、<それって汚いでしょ。ペピ、これで遊んだらどう？>とビニール製の輪投げを彼の方へと投げてやる。するとそれを掴み取り、嬉々として遊び始めた。噛んだり、両手でグニャグニャと潰したり…。突然彼は力強く<ダ、ダ、ダ、ダァー、タ、タ、タ、ター>と音を出した。とってもリズムがいい。母親はそれに呼応して、<タ、タ、タ、ター>などと声を出す。時折、ペピは両腕を宙に舞わせるぐあいに振り回している。いつものように…。以前よりもちょっと少なめであり、その代わり、彼はどうやら他の変な癖が身に付いたようだ。眼を頻りにまばたかしているのだ。顔をちょっと歪めたりもする。彼は恰も心の内で締め出したい何かがあったり、もしくはごく単純に直面したくない何かを抱えているのかとふと気掛かりを覚えた。

母親は私の病院(St.George's Hospital)での仕事はどんなふうかと尋ねた。彼女は心理臨床にとても興味がありそうだ。問題を抱える子どもの治療ということだが。特に彼女はわたしたちが‘母親’にどのように対処しているのかを知りたがった。彼女が言うところでは、彼女は学校で多くの問題を抱える子どもに遭遇することがあったわけだが、今や‘問題’なのは子どもではなく、いつも‘母親’だという結論に至ったということを語る。そして彼女は幾つかそうした例について語ってくれた。母親はペピを抱き上げて、ベビーチェアに腰掛けさせた。そして彼にヨーグルトを与え始めた。ペピはとてもおとなしく、実に良い子のように振舞っている。つまり彼は全然騒ぎ立てることはなかったという意味だが。しかしながら、折々に彼は頻りに激しく眼のまばたきをしていた。そこで母親は私に話をしていた。彼女はひどく熱心に或る女の子の話をしてくれた。その子は彼女のクラスを卒業し、新しいクラスに進級したのだけれどもどうにも適応できずにいた。彼女は新しいクラスの担任に対してとても不躰で攻撃的なんだそう。そしてクラスのなかで厄介な行動に出ることが多いとか。それで担任はその子に対して酷く頭を悩ませているんだとか。そこで問題というのが、母親がその娘の側に立ち、娘がその教師について言うくひどいやら意地悪やら・・・をいちいち間に受けるということであった。学校側は、彼女に娘を『Child Guidance Clinic』に治療を受けに連れてゆくようにと助言した。彼女はこのことでひどく心証を害してしまい、学校の教師だろうと『Child Guidance Clinic』だろうと、すべてを敵視するに至ったというこらしい。事実というのが、その母親は学校で賄いの料理人をしているんだそうだが、その彼女にしてみればMrs. Pは友人なんだそうで、つまり‘教師’の一人というふうには見做していないわけなのだ。そこでMrs. Pはどうにも奇妙な立場に立たされる羽目となった。というのはその母親は、あらゆる苦情を彼女にぶちまけ、娘のことで同情的ではない、理解を示す事のない教師たちについての愚痴を大いにこぼすのであった。結局のところ、Mrs. Pはくほんとうはね、治療を必要としているのは母親だって思うのよ>と結論づけ、この話を締め括った。私はそれに付いては何もコメントをしなかった。

一方、ペピはどうやらリラックスしてきて、ハッピーな顔で母親の顔を眺めており、時には私の方に向かってごくぼんやりとした笑みを投げて寄越した。そして時々、彼は母親のお喋りをくダ、ダ、ダア、アア>と遮った。母親はくそう、ダ、ダ、ダディね。ダディ(お父さん)はまだベッドで眠っているわね>と応える。今や彼は両腕を高くまっすぐに上げ、振り回し始めた。母親はこれを面白がり、彼の動作をそのままそっくり真似をしてみせて、ちょっと彼をからかった。くさて、どこに君のピアノがあるわけ?>と言う。そこで私が彼にく私たちには見えないピアノがあるのね、それをペピは弾いているってわけなのよね>と言うと、母親は笑って、くそういうことね。じゃあピアノを弾くことにしよう。ほらほら、やっご覧>と言って、それから二人揃ってこのちょっと気違いじみた遊びをし始めた。両腕を振り回し、からだを揺すって、力強くくオーオーオー>と甲高い叫びをあげる。ペピは嬉しくてたまらないといったふうに高笑いをする。恰も母親にくねえ、これって愉快だねえ>と言わんばかりに・・・その少し後で、彼は《リピナ》を飲み終え、ちょっとそわそわ落ち着かなくなった。だが、ベビーチェアのベルトの紐を手に取り噛んだりしゃぶったりしておとなしくなった。母親は、くさてと、おリンゴを食べようね。食べてごらん。しっかり食べるのよ>と言う。彼はそれをすぐさま手にして、口の中へ入れる。そして懸命にそれに齧りつき始めた。彼の真剣な面持ちと、そのクシャクシャとリンゴを食べる音がわれわれを思わず笑わせてしまう。

しばらくして突然彼女は、<どうもペピがあまり調子が良くないの。どうやら歯が生え始めたことと関係しているみたい。おそらく痛むのではないかしら。..(ペピに向かって)チズゴにおまえさんが今朝何時に起きたのか話そうか？朝の4時だったよね。おまえさんは私の寝床に来ちゃいけないんだけどなあ..>と、彼女は彼に微笑みながら、でもどこかアンビバレントというか、もしくは困惑した面持ちを示している。些か内省的な感じであった。ここでペピが大きく口を開け、母親の方を見あげた。彼女はすぐに反応し、私に熱心に<ほらね、見た？2本歯があるのよ。あら、あなたは近眼だったわね>と言う。そこで私は立ち上がり、彼らの方に近付いたが、ちょっと遅かりしというわけで、ペピは再びリンゴをしゃぶり始めていた。母親は人差し指を彼の口に差し入れ、私に彼の生え始めた歯を見せようとする。<ほらほら、ねっ、ペピ..>と。だけどそれもどうも効果なし。そこで<あらまあ、見逃しちゃったみたいですね>と言って、私は自分の椅子へと戻った。

それからしばらくして、ペピは手にしていたリンゴの切れ端を床に落とした。それでも別に騒ぐこともなく、ただポケットのまま。母親が穏やかに、<今にそうするって思ったわよ>と言う。それからそれを拾い上げ、水で洗うと彼にそれを手渡す。そして、<そうね、しばらくベビーサークルの中で遊ぶのはどうかしら？まだお風呂には早いね。たくさん遊んで、それで夜はずうっとぐっすり眠れるといいわね。だからこのリンゴを食べちゃいなさい>と彼に言う。それから彼を腕に抱き上げて、皆で一緒に居間へと移動する。母親はペピをベビーサークルの中に入れてやる。彼はかなり安定したふうに立っている。両腕でベビーサークルの柵を握り、体を支えていた。それから彼は片手を離したり、頭を後ろへと振り向かせたり、そして体の位置を変える！母親はきっともうじきに彼は歩くのではないかと思うと語る。確かに姿勢が随分としっかりと安定している。突然母親が腰を屈めて、<ほら、見て見て>とベビーサークルの陰に身を隠し、それから<いないいないばあ>と言って、また姿を現した。ペピは嬉しくてたまらないという叫びをあげた。そこで母親はそれをまた繰り返した。ペピはこの<いないいないばあ>のゲームにはもうすっかり慣れているみたいで、クスクス笑いをしつつ、いなくなった母親がまた現れるのを自信ありげに覗いている。恰も<ぼく、ママがやること分かってるもん..>といった感じだ。

母親はしばらく肘掛け椅子に腰掛けていたが、それからふと偶然戸棚の奥に‘鳩時計’を見つけたという話をする。ペピがそれをひどく喜ぶんだそうだ。彼女は立ち上がり、部屋の隅にあった箱を取ってきた。<これ壊れちゃってるの。修理しなきゃ..>と言いながら、そこから‘鳩時計 coo-coo clock’を取り出し、その木製の家の中から2匹の小さな鳥が出てくるのを私に見せた。ペピは鳥たちが木の家からピョンと踊り出てきたり、またピョンと引っ込んでいなくなったりするのをずうっと長い間飽きもせず眺めていたんだとか。私もとっても魅了された。母親はしばらくちょっとニタニタって笑っていたが、実はそれはもう15年ほど昔になるがかつての男友達から貰ったのだという話をする。彼女が学校にそれを持っていったら、子どもたちが大喜びして、それで遊んだものだから、結局壊れてしまったんだそう。<その彼女の話し振りからして、まるで<壊れちゃって、ほんとに良かったわ>とでも言っている調子だった！>間を置いてから、彼女はその鳩時計のかつての持ち主であった男性についてかなり長い話を私にした。そしてどうしてそれが彼女の手へ渡ったのかという仔細についても..。彼はかつて彼女がカレッジにいた頃の

‘取り巻き’の一人だったんだとか。かなり裕福で、だけど相当ひどいケチな人で、もうとんでもなく自己中心的な人だったんだそう。彼は航空デザイナーで、40歳であった。いつか自分は英国空軍の司令官になると豪語してたんだとか。或る日、彼は彼女を弟の家を訪問するけど一緒にどうかと誘ってきた。(なんと彼は彼女の車を使った！)そしてその帰途、道に迷った。それは彼が道順をいかにも知ったかぶりして、あっちへ行けだのこっちだのと指示を繰り返したせいなのだったが。それでついには車のオイルがなくなってしまうという事態となった。それでガソリンスタンドで、もう真夜中も過ぎていたから超過料金をも払わなくてはならなかったのだが、なんと彼女が当惑したことには、いざ支払いという段にはその男の姿が消えていたんだとか！彼はその辺りをうろろろしていたんだろうが、やがて車に戻ってきた。だがその支払いの件にはまるっきり触れず、彼女がなんと8も請求されたのよと言っても、まったくウンでもスンでもない、無反応だったんだとか。そして後日、彼女はこの時のことを彼の妹に冗談として語ったんだそう。ところがその彼女は兄の極端なケチに激しく憤って、Mrs. Pに対してまったくフェアじゃないわよと彼を詰ったんだそう。つまりそれが、彼がその鳩時計を彼女に送ってきた理由なんだそう。謝罪の意味で。8の代わりというわけで。彼がどうして鳩時計を送ってきたかというのにはもう一つ他の理由もあって、それは彼の妹から暴露された話なのだ。実のところ彼はMrs. Pと結婚したがっており、またこの鳩時計をいたくお気に入りでもあった。だからもしも彼女と結婚したら、その鳩時計も再び彼の所有に戻るといわけなのであった。それがどうやらその頭のいい彼が考えたことだったようだ。この喜劇めいた物語には私も笑わずにはいられなかった。われわれは一緒にもう笑い崩れた。それから私は、ペピへと注意を向けた。彼はベビーサークルの中でひどくおとなしくしている。ちょっと何だという顔をしていて、<何を話しているのやら、ぼく分かんないけど。だけど気にしない。全然かまわないもん・・>といった調子で、自分の玩具を相手に一人ご機嫌でいる。さて、その物語はそれでおしまいなわけではなかった。そこでMrs. Pは話を続けた。その後になってやがて彼はU. S. Aへ行ってしまふ。‘一稼ぎする’ためにだったそうだが。彼女にはサヨナラやら一言もなかったんだとか。しかしながら、彼女が最初の夫と結婚をしたとき、実に彼女にしてみれば困惑の極みだったそうだが、なんと彼は完全に打ちのめされて、それで彼女に<他の男と結婚するなんて、どうしてそんなことが出来るのか。ひどいじゃないか。ぼくに一言も言わずに・・>などと大いに詰ったんだそう。今でも尚、彼は<あなたはぼくの人生を破滅に追いやった・・>と言うんだそう。その言葉を2回繰り返し、<そうなのよ、そう彼は私に言ったわけ！>と、可笑しさと悲哀感の入り混じった表情を浮かべた。実際にかつて彼はひどく外見を気にする人であったんだそう。いつでもパリッとした見映えのする恰好をしていたんだそうだが、今やまったくのところ唯の‘老人’になっちゃてるのと言う。<だからね、私はもうたくさんの悩みごとを背中に負っているってわけなの・・>と冗談っぽく、ちょっと恥じらいを含んだ微笑をした。私は彼女が話を誇張しているとは全然思わなかった。ほんとうにその通りなんだろうなと思った。それでコメントは控えて、ただ黙って微笑んでいた。

われわれはここでペピが何をしているのかと注意を向けた。彼は天井からぶらさがっているものを夢中になって引っ張ろうとしていた。だが残念ながら手が届かない。そこで思いっきり爪先立ちをした。熱心にそれに目を当て、両手を伸ばして、体をベビーサークルに凭れかからせて・・。彼は実際のところ、

生真面目に懸命にやってはいたが、結果は出せず、それに触ることすら出来ずに終わった。それでも彼はまだやる気でした。背伸びして思い切り手をそちらへ伸ばそうとする。私は今に彼がバランスを崩して倒れるのではないかと案じた。母親は私に、<ねえ、見たでしょ？それはそれは意志堅固なのよ。絶対諦めないわけ。もし今出来なくても、それを覚えていて、明日また同じことをやろうとするの・・>と言う。母親はベビーサークルへ行き、ペピを座らせた。なぜなら、おそらくペピがもう充分長く立ちっぱなしでいたと母親がちよっと案じたからだろう。それから彼女は、<この前、彼女のクラスの6歳の女の子が訪ねてきてね。それでこれをペピのために作ってくれたのよ>と言って、小さな旗を嬉しそうに私に見せた。それから次々に学校の子どもらからペピへの贈り物として貰った品々をあれこれと私に見せてくれた。それらの殆どは紙で出来たものだったから、そこで母親が、<これを戸棚に仕舞っているの。そうじゃなければ、ペピが食べちゃうから・・>と大きく笑った。彼女は彼に、<ええ、ええ、そうよ。S. ね、覚えているでしょ。おまえさんにとってもよくしてくれたわよねえ。そうでしょ、ペピ？>と言う。それからいかにも私が面白いだろうと察して、その6歳の女の子がペピとどんなふうだったのかを語ってくれた。彼女はベビーサークルの中に入りたがり、そしてペピと玩具でたづぶり遊んだんだそう。2人はそうして尽きない喜びに浸ったというわけだが。その上に彼女はペピと一緒に風呂に入りたいたったんだとか。Mrs. Pが<どうしてもって言うなら・・>と言ったんだそう。それで結局のところ彼女はペピと一緒に入浴を大いに楽しんだという話であった。母親は、ペピが学校で子どもたちをどんなに好いているかということ語った。彼らがペピに話しかけてくれる、ハチャメチャで意味のないお喋りをすっごく喜ぶんだそう。<昨日などはね、午後遅くなっただけ、学校にまだ居たわけ。それでK. に頼んだわけ。ペピにヨーグルトを食べさせてやってはくれないかしらって・・。それでヨーグルトをその子に手渡したのよ。(おそらく彼は母親が勤めに出ていて、だから迎えにきてもらうまで学校で居残りをしていた子の一人に違いない。) Mrs. Pに拠れば、その子は極端におとなしく恥ずかしがりやなんだそう。どちらかというと内向的というか、それでクラスの中で言葉を発することはごく稀といった子どもらしい。ところが、ペピとは気が通じたというか、熱心に彼にヨーグルトを食べさせていたらしい。<それで徐々に、彼は周囲のことをまるで頓着しなくなっていくみたいなの。それでまるっきり恥じらいをかなぐり捨てたわけ。それで、ペピに話しかけて、もう延々となの。お喋りしながらもニコニコと笑みを浮かべたり、クスクス笑いをしたりなのよ>と語る。Mrs. Pの顔はこの話をしている間、瞳を輝かせていた。

しばらく間を置いて、突然彼女は、<あのね、最近のこと。うちの学校にウガンダからの政治難民の子が入って来たの。それでその子の母親のMrs. Hが学校にやってきて言うわけ。ドレスを作ってやるから、布地を持ってきてって・・>。そう言えば、布地のストックがどこかにあったわとMrs. Pは思い出し、彼女にブラウスとズボンとを作ってくれるように頼んだというわけだ。詳細に指示を書いたメモと、それから念のため、彼女のブラウスとズボンをも貸し与えたという具合で。実際にMrs. Hはそれらをオリジナルのパターンとして要るということだったから・・。だがしばらくして彼女は学校に現れて、Mrs. Pに<申し訳ない、申し訳ない・・間違っちゃって・・お支払いは結構ですので・・>と言ったんだとか。突然彼女は笑いで話を遮り、それからそのMrs.H の作品なるものを持って来て、私に見せた。彼女はニタニタって笑って、<ほらね、でしょ？>と言う。私はもう驚愕した。それはどうしようもなくお粗末なものであった。

われわれは同じ言葉、つまり「こんな見たことない！」を同時に発した。彼女はクスクスと笑っていた。「ほらね、袖がここでこんなふうなはずなのね。ボタンの穴はこんなふうでこうなるはずなのよね」と、際限なしに。それから彼女はそれを着てみせて、ファッションショーのモデルの女の子みたいに気取ったふうに体をくねらせ、ペピに向かって、「ほらね、見てよ、ペピ。ママ、素敵でしょ？」と声を掛け、そして笑った。私は笑えなかった。それで「ちょっとショックじゃありませんでしたこと？」と訊いて、それは私の妹が5,6歳頃に作ったお人形さんのドレスを想起させるという話をした。母親は、「ほんと、まったくその通りよ！」と答えた。肘掛椅子に戻って腰をかけ、ほんのしばらく真面目な顔をしていたが、それからまたニタニタとおかしそうに笑った。彼女はズボンがどんなふうだったかを語った。それはそれはもうでっかくて、まるで3人もの人がすっぽりと入る具合だったんだとか。それでついにはMrs. Hはそのウエストにゴム紐を通したんだそう。そうすればMrs. Pにもひとまず着れるというわけで…。実際のところ、学校ではMrs. Pが彼女の最初の顧客ということであつたらしい。この眼を剥くような恐ろしい結果からして、これ以後他の誰もがMrs. Hに縫い物を頼むのを遠慮したということらしい。しかしながらとにかくMrs. Hは‘良心的’であり、Mrs. Pに支払いを請求するについては遠慮がちであつた。しかし彼女は是非のもと彼女に支払いを申し出た。なぜならば、Mrs. Hが一生懸命にこの仕事に取り掛かつたならば、当然その代価は支払われてしかるべきだというのが彼女の考えなのであつた。そこで彼女は結局のところ75ペニーを支払った。つまりそれがMrs. Hが彼女に申し出た金額であつたから…。Mrs. Pは、「確かにねえ、布地が無駄になつちやつたのはその通りなんだけど…。だけどあれもずうと戸棚の奥に仕舞い込んであつたわけだし…大した出費でもなかつたわけで…」と語った。私としてはどう応えればいやら、言葉がなかつたのでコメントは控えた。代わりに、これらの物をどうなさるおつもりですかと、つい好奇心が募り、彼女に訊いた。「あら、‘がらくた市(jumble sale)’にでも出すしかないわね」と言つたので、再びわれわれは爆笑した。

ペピはベビーサークルの中でバブバブーなどと力強い音を発していた。ハッピーで至極満足げな笑みを顔に浮かべながら…。母親は、「見た？あの子もわたしたちと一緒にお喋りをしているんだわ！」と言う。腕時計を見て、「それじゃあ、入浴の準備をするわね」と言って去る。ペピはお座りをして、ベビーサークルの柵を両手に掴んで、自分のからだを前後へと押したり引いたりを頻りにやっている。喉を鳴らしながら、一人でまるでご機嫌である。実のところ、彼は私の存在には大して注意を払うことはなかつた。ところが間もなく、彼は身動きが付かなくなった。なぜなら両脚が柵の間に嵌ってしまったものだから。それでしかめっ面をして、幾らかむずかる音を漏らした。私は立ち上がつて、「あらまあ、可哀想に…」と言って、彼の座る位置を直してやつた。すぐに彼は大丈夫になり、玩具に気持ちを向け直した。その少し後に母親が現れて、「ちょっと遅くなつちやつたわね。ほら、私がチズゴにMrs. Hのこと話してたもんだから…」と言ひ訳をし、それから彼に笑顔に向けた。「Mrs. Hのこと、覚えてるでしょ、ペピ？おかしな人よね…」と言つてるみたいに…。

われわれはバスルームへと移動した。母親は彼をベビーマットレスの上に寝かせ、彼の衣服を脱がせた。オムツが外れるや否や、その瞬間に彼の両手が彼のペニスへと伸びた。「そうね、それだわね。

あったわねえ・・・>と母親は言う。彼女は彼を抱き上げ、彼のからだを両腕に持ち上げる恰好で、<さあ、いいかしら。1,2,3・・・それっ・・・>と彼をお湯の中へジャボンと入れた。ペピはバスタブの中で座っていた。そしてすぐさま泡立った水の滲みたスポンジを手にとって、それを吸い始めた。母親はやさしく彼の肩を擦り、それから彼を横倒しにして、体中を丁寧に洗ってやる。それから洗髪も・・・彼は足蹴りを頻りにしている。かなり力が籠もっている。母親は戯れに、スポンジを絞って、彼の頭にお湯を掛けてやる。そこでペピの顔は濡れてしまうが、全然平気なふうである。ただパチパチ瞬きをしている。軽く笑みを浮かべながら、いかにもくぼく、知ってるもん。これって愉快だ>と言わんばかりに・・・母親はクスクスと笑って、それから彼の顔をきれいに拭いてやる。それから彼のからだをベビーマットレスの上に寝かせ、彼のからだ全体をバスタオルで包んでやる。彼はまったくのところジツとしたままである。間を置いて、母親はバスタオルの端をちょっと引っ張って、彼の顔を出してやる。そして覗く。彼らは互いに認め合い、ククッと笑い合った。母親はこのゲームを繰り返した。彼女自身これが面白くてたまらないみたいである。<おまえさんは可愛いハトちゃんだねえ。ムッシュ・・・ムッシュ・・・ムッシュキンだねえ>と言う。さてここで彼女はベビーパウダーをお腹、お尻、それに背中に振りかける。それを擦りながら、<塩とピニガー・・・塩とピニガー・・・>と言って彼をからかう。〔註；揚げ物に塩とピニガーを掛けて食べる真似。〕からだが自由になった途端、ペピは背筋を思い切り伸ばして、頭の後方にあった電気のプラグ〔差込〕へとからだを向けた。母親は急いでベビーマットレスを脇へとずらして引っ張った。〔勿論、ペピも一緒にだが。〕<何をしようとしているのか分かってるわよ。配線コードを触ろうとしてるんでしょ。よく分かんないけど、でもそれっていいことには思えないわねえ>と言う。彼はからだを頻りに揺すって、母親から逃れて、配線コードの方へと向かう。いつもの彼流の‘意志堅固’というやつである。母親は彼に衣服を着せようと苦戦していた。ペピが彼女の腕から逃れんばかりであったので・・・彼女はクスクスと笑っていた。どうにかそれも終わり、そして立ち上がって、ペピを両腕に抱えた。突然彼は風呂の水を熱心に見遣って、何やら喃語を発した。恰もくぼく、もっと欲しいよー！>って言ってるみたいだった。母親はくダメよ。またもう一回濡れちゃうでしょ>と言いながら、それでもほんのちょっとの間彼にお湯を眺めるチャンスを与えた。母親はペピを彼らの寝室へと連れて行ったが、すぐに引き返して来た。<おやまあ、お父さんはもう起きてるみたいだわ。まあ、いいわ。居間でお乳あげることしようね>とペピに言う。おそらく彼女は夫にベッドでペピに哺乳瓶のミルクを与えさせてやりたいと思ったのだろう。二人に一緒のときを過ごさせたいと思っただけなのに違いない。母親はミルクの入った哺乳瓶をキッチンから取ってきて、それから皆で居間へと向かった。

何ら騒ぎ立てることもなしにすんなりと彼は哺乳瓶に吸い付き、そのまま力強くゴクゴク飲んでゆく。彼自身が両手で哺乳瓶を持っていたが、ちょっと後で母親は手を添えた。彼の右手が自由になり、そこで空を泳ぐような動きをした。それから母親の顔に届いた。母親はペピの指にキスをするのにちょっと腰を屈めており、彼女の顔は彼の手が掴めるところまで近付いた。勿論、この間彼は尚も哺乳瓶をぐくぐく吸っていたのだが。母親の唇がかすかに開いていた。そこでペピの指がそこへと押し入った。彼女の唇をいじくり、彼女の歯を小突き、そして彼女の口の中で指をうごめかしている。（ここで妙な話だが、‘母親のからだの中へと侵入する penetrating into Mother's body’という言葉が脳裏に浮かんだ。）

事実、彼女はちょっと痛かったに違いない。頭をゆっくりと横へとずらし、彼のやる気を失わせようとした。そこで彼の手は彼女の頬に近付くことになった。偶然だと思うが、彼は彼女の頬を軽くトントンと叩いた。しかし驚いたことには、それと同じことを、もっと力を込めて、やや力任せに彼は3,4回しつこく叩いたのである。(勿論のこと、彼はまだ哺乳瓶を口に咥え、ごくごく穏やかな風情なのだったのだが…)彼は何らかの‘攻撃 aggression’を表出しているといったふうには見えなかった。おそらく彼は水の面を叩いて水飛沫をあげるのを楽しむ具合にそうしたのだと思われる。だが、彼が叩いているのは母親だという事実をまったく無視していたのである！母親は穏やかにここでも彼からちょっとからだをずらした。それで今度はなんと彼の手は母親の耳にぶらさがっている耳飾りに手が届いた。そこでそれを自分の手のひらで掴み取り、いじり始めた。しばらくして彼は哺乳瓶に気持ちを戻した。それもほとんど終わりに近かった。彼が最後の一滴を飲み干す頃には、彼はぐっすりと眠っていた。彼は母親の腕の中で、すこやかな深い眠りに就いている。平和を絵に描いたような光景である。ひたすら安らかな呼吸をしていた。(でも、ちょっと驚きであった！いつもだったら口に親指を咥えてるところだが、そうはしていなかったから…)長い沈黙が続いた！母親はただジッと彼を見守っていた。それから彼の方に腰を屈めて、彼の額にキスをした。間を置いてから、また彼女は彼にキスをした。そして3回続けざまにいとおしげに優しくキスをした。恰もそれは<ああ、何て貴くもいとおしげなものかしら、我が子って…>と言っているかのようだった。彼女はゆっくりと立ち上がり、注意深くペピを腕に抱えて、寝室へと運んでいった。ちょっとして彼女は戻って来て、私に<あの子ったら、躰をかいていたわよ>と情愛のこもったまなざしで私に語った。ハッピーな微笑みはその顔に浮かんでいた。

私は<今日とはとても有難うございました>と伝えると、彼女は<おいでくださって、どうも有難う>と応えた。次回の約束を手早く取り決めて、私はお暇をした。

■第27回目の訪問〔概略〕 ペピ;9ヶ月&3週目 1974/10/05 (4:35-6:45pm)

彼は何やら怪しむ目つきで私を何度か眺めやった。母親は美容院に行ったらしい。ペピも一緒に連れて行ったんだとか。それというのも、何ごとにもペピには‘経験’になるからということだった。ところがそこに或るご婦人がいて、ペピのことで派手に騒ぎ立てたんだそう。<何ていい子なのかしら！何て可愛い赤ちゃんだこと…>と言って、彼の方へと近付いたんだそうだ。そこで突如ペピは恐れおののき、声を張り上げ、泣き叫んだんだとか。われわれがこの話をしている最中、ペピはどうか少しリラックスし始めていた。

母親は肘掛椅子に腰を掛けていた。ペピは彼女の膝の上において、リンゴの切れ端を齧っていた。突然彼は前のめりになって、椅子の木製の肘掛の部分をトントンと叩き、またリンゴへと戻った。それからまた椅子をトントンと叩くしぐさを繰り返した。真面目な、でも意欲的な顔付きである。母親は面白がる。<それって、何なの？リンゴを食べてるところじゃなかったの？>と彼女の腕を肘掛に置いて、それをペピがしたのとまったく同じように軽くトントンと叩き、それをまた膝の上へと戻した。驚いたことに、すぐ

さまペピは、自分の手を母親の手の方へ伸ばして、その手を引っ張り、持ち上げ、そして肘掛の方へと動かそうとした。いかにもくもう一回、今のと同じのやって！>と言ってるふうだった。残念ながら、母親はこのペピの動作の意味するところに気づかなかった。だが、彼女は偶然ながらまた手を肘掛に置いた。軽く人差し指でトントンと叩いた。そこで再び、意志堅固と好奇心と快感とが溢れんばかりになって勢いづき、ペピは前のめりとなって、母親の指を掴んで、それらを上下にタッピングさせようとする。いかにもくほら、ほら、叩いて！>と言わんばかりなのだった。が母親はこの状況をうまく把握し得なかった。

さて、母親が入浴の支度をしている間、ペピはベビーサークルの中にお座りしていた。折々に彼は緊張した面持ちでからだを強張らせ、頭を軽く持ち上げ、どこか遠くをジッと眺めやりながら、鋭いカナキリ声を張り上げた。それは、これ迄聞いたことのなかったほどいかにも恐ろしげに聞えた。私は些か不安を覚えた。誰か部屋の外の人聴いたら、私が彼を殺してもしているんじゃないかって。おかしいことだが、この喚き声を張り上げると、その度ごとにペピはまるですっきりした感じになるのであった。恰もくそうそう、やったあー！>と、いかにも我が意を得たりといった感じである。そして時々クスクス笑いをするのだ！！そこでこの件で私が抱いた感想は、おそらくどこか制御しかねている‘攻撃性 aggression’をこうしていくら発散しようとしていたに違いないということだった。

入浴タイムとなり、彼はお湯の中で、プラスチックのお魚さんと遊んでいた。それからそれを手にして、バスタブ目掛けて力任せにバンバン投げつけ始めた。母親は、くあらまあ、お魚さんが可哀想・・・何かいけないことしたかしら？>と彼に訊く。母親がオムツ交換をしているとき、ペピは自分のペニスをいじっていた。母親は、くあら、だめ、だめよ。引っ掻いちゃ・・・傷つけちゃうから・・・痛くなって血が滲んできちゃうでしょ・・・>と彼を諭す。(因みに、ペピのお尻はひどかった。もうまるっきり真っ赤なのだ。オムツかぶれのせいである。)彼女はそれを止めさせようとした。ところが彼はペニスをいじることを続けた。母親が何回か遮ったのだが・・・そこで母親は急いでオムツを替えねばならなかった。

母親は、ペピの上着を毛糸で編んでいて、それがやっと仕上がったのだという話をする。くだけど、変なのよ。ちょっと大きい・・・>と笑って言う。彼女の持論は、多くの母親が我が子を出産しただけ長く赤ちゃんっぽくしておきたいと思い、いかにも可愛い赤ちゃん用ドレスを着せるのにはいいとは思えないということなのだ。くペピは、もう大きな男の子だもの・・・！>とのことであつた。そういうことらしい！

ペピは母親の腕の中にいた。哺乳瓶でミルクを与えられている。時々彼は指を母親の口のなかへと押し込もうとする。そしてその指をくねくねと頻りにうごめかせている。哺乳瓶のミルクを半分ほど飲んだところで、もう要らないということのようであつたから、間もなく彼は寝床へと連れてゆかれた。

■第28回目の訪問〔概略〕 ペピ;10ヶ月 1974/10/15 (4:30-6:10pm)

ペピはどうやら依然としてよそよそしく打解けず、私の方を警戒するような目つきでジッと見ていた。

母親は彼の最近の写真を幾枚か私に見せた。私はベビーサークルの中の彼の傍らにいて、彼に腰を屈めて、それらの写真を彼に示し、<ほらほら、ペピ。これってすべて‘ペピ’だよ。可愛らしいでしょ>と声掛けた。私が彼の方に振り向いて、一瞥したら、なんと驚いたことに、彼は実にご機嫌よく微笑していたのであった。そこで私は急いで写真へと戻って、なんだか彼と一緒にハッピーに感じられて、写真についてあれこれお喋りを続けた。私は彼にごく接近していた。彼と向かい合っただけではなかったのだが。そして間もなく、私の髪の毛が彼の手で掴まれていることを察した。それは私の髪の毛をいじくり、それから引っ張ろうとしていた。

母親が食べ物を持ってキッチンから戻ってきた。トレイにはセロリが置いてあった。<あのね、私は今厳しくダイエットしている最中なのよ。このクリスマスの休暇中、われわれはアフリカへ旅行を計画しているの。体重を落とさなきゃ、でなければ夏服が着れないってことになる。だから、ビスケットの代わりに、このセロリを食べるわけ・・・>と説明した。そこで彼女はペピにもセロリを与えた。彼に<ほら、ペピ。ねっ、こんなふうに食べるのよ>と、彼女自身がセロリに齧る。ペピは床の上に座っていた。なんとかセロリをものに出来そうな気配だ。時折それを床に落とすことはあったが。そしてそれを拾って、またわざとセロリを落とす。それを繰り返した。母親がそれを彼から取り上げて、セロリに付いた塵をちょっと拭いてやろうとするや、彼は唸り声をあげ、それを奪い取ろうとする。母親はセロリを齧って、それからペピに<ほらね、セロリの穴からお顔が見えるわよー>と愉快げに語る。確かに、彼女の手にするセロリには大きな穴があって、それに彼女の眼を当てていた。ペピはチラッとそれを見て、クスクスといかにも面白そうに笑った。母親はこのゲームを続けた。どちらもがハッピーな笑い声をあげた。(いかに気持ちに通じているか。ペピがこの遊びの意味するところの面白さを把握できているということがひどく驚きであった。)そして彼がセロリをしゃぶっている間、突然彼は何度もからだごと前のめりになって、片方の手を母親の膝の上へと伸ばした。(そのとき母親は彼の傍らで床に座っていたのだが。)その彼女を熱中したまなざしで見詰めながら、空を泳がせるようにして指先をタッピングしていた。母親の膝は手の届くところにはなかったで・・・その後、私は彼のセロリに彼の齧った歯型が付いているのを認め、感動した。[彼はたった2本の歯があるだけだが、どうやらあと2本ほどが出かかっているところらしい。]

母親は彼にベビーカップを与え、《リビナ》を飲ませた。ペピはそれを両手で掴み、何回か吸ったが、落としてしまう。それは床の上を転がった。そのカップの蓋には小さな穴があって、そこから飲み物が漏れている。それで母親が急いでそれを手に取り、ペピの手に戻した。しかし彼はまたもやそれを落とした。明らかに故意にである。そしてそれを小突いて転がした。母親がまたもやそれを掴み取り、そしてペピに手渡し、彼女の手を添えて、飲み物を飲ませようとする。ペピはこれにはまるで気に入らない。母親の手をどけようとする。そして頑としてカップを小突いて転がそうとする。彼は怒ったうめき声を上げた。明らかに母親の介入への抗議である。しばらくして、母親は蓋を外して、《リビナ》をカップから飲ませようとした。するとペピは、此の度はなんら騒ぎ立てることなしに、大きな男の子みたい(!)に、両手でカップを握って、それを飲み干したのであった。

このすぐ後で、彼はお座りをしていたのだが、たまたま窓の外から凄まじいモーターバイクの走り去る爆音が聞えた。するとペピは、そちらの方へと体の向きを変え、それから体を前後へと力強くリズムカルに動かし始めた。同時に<ダ、ダ、ダアー>と声を張り上げながら…。なんだかひどく面白がっている。路上から聞えたモーターバイクの音を意識しているようだ。もしかしたら母親の運転する車の中にいる記憶を想起させられていたのかも知れない。

母親は彼を腹這いにし、<ほらほら、ひっくり返ってご覧>と促す。両親のダブル・ベッドの上で彼は転がってはひどく愉快がるんだとか。母親は彼をひっくり返した。それからまた彼をうつ伏せにした。体をくねらせ身をよじるようにはするが、這い這いとまではゆかない。それから直に彼は欲求不満となり、焦れた泣き声を上げた。顔をクシャクシャにして…。母親は彼をまたベビーサークルの中へと入れた。その傍らのクッションの上に新聞紙と何冊かの雑誌類が置いてあった。母親はそれを手にしてちょっと引っ張り退けた。クスクスと笑いながら、<今日の新聞はこの子の手の届かないところに片付けて置かなくちゃね。だってペピが食べてしまうから…>と言う。そこで代わりに‘古い新聞紙’をどこかからか持ってきて、それをペピに手渡した。彼はすぐさま、それに掴みかかり、まったくほんとうに口に入れた。彼はそれに没頭した。齧ったり、くちゃくちゃとなぶったり、丸めたりと…。新聞紙の各ページは彼の周りに散乱したまま。彼は必死になってそれに攻撃を仕掛ける。恰も新聞紙が彼にとっては何やら巨大な‘怪物’に見えているかのようなのだ。

しばらくすると、徐々に彼が私に対して疑いのまなざしを向けることはなくなっていくことに気づいた。さほどよそよそしくもなくなり、私の存在に注意を向けていた。そして、私の安堵したことには、彼は折々に私の方に向けて情愛のこもった微笑を浮かべることもあったりした。

入浴タイムになり、たくさんの泡だったお湯の中で遊ばせてから、母親は彼を抱きあげてバスタブから出した。すぐさま彼は抗議の呻き声をあげた。マットレスの上に寝かせられて、彼はだんだん焦れてゆく。母親は彼を優しくあやし、彼の注意を逸らそうとプラスチック製のお魚さん’を与える。ペピはそれを掴み、吸ったり舐めたりした。そしてしばらくしてそれを傍らの壁に向けてガンガンと叩いた。母親が彼に衣服を着せ終わった後、彼女は彼を腕の中に抱きしめ、そしていとおしげにキスをした、ペピは嬉しげな高笑いをした。それから彼はからだを起こして母親の顔に向かい、手をうごめかせて、それからなんと実に彼女の顔をつねったのだ！そしてそれから彼女の顔を叩こうとする。しかしすぐに母親は彼を諫めて、<ダメ、ダメよ。そうしちゃいけないの(No.no! You are not allowed to…)>と言って、彼の手をどかさず。やがて母親がバスルームから立ち去ろうと身を起こすと、腕の中のペピはまた不満げな呻き声をあげた。バスタブのお湯の方へとからだを傾けて…。恰も<もっと…>と言ってるみたいに。そこで母親がプラグを抜き、そしてお湯がバスタブの栓の穴から流れ落ちてゆくのを彼に見せてやった。ペピはまったくのところそれを夢中になった。ジッと熱心に見入っている。いかにも意識的に<これって何だろう>って観察しているような目つきであった。

母親は彼に哺乳瓶を与えようとした。ところがペピは彼女の膝の上で全然落ち着かず、からだをよじらせる。まるでひっくり返るほどだ。そして後ろの何かに手を届かせようとしているみたいであった。灰皿である！〔彼はそれがそこにあるのを了解していたのだ！〕事実、傍らにはアフリカ製の手彫りの台座が一つあり、その上には煙草と灰皿とがあった。そしてペピは彼のいつもの頑として譲らない気性でそれらに手を伸ばし、いじり始めた。母親はどうにか彼を腕の中に落ち着かせようと苦勞した。哺乳瓶を与えたが、どうにもダメなのだった。そこで彼を彼女の足元に座らせた。彼は顔をクシャクチャに歪めて、焦れた怒った声をあげた。母親は彼に哺乳瓶を手渡したが、ペピはそれを手で払いのけた。それで瓶は倒れてしまう。彼はそれを再び小突いた。恰も、〈違う！これはぼくの欲しいもんじゃない・・・〉と言っているようだ。母親はほんのしばらく後になって、もう一度彼を授乳の体勢に抱きかかえ、吸わせようとしたが、ペピはまたまた同じことを繰り返した。そして、すったもんだの末、どうにか両手にその灰皿を掴んだ。そしてそれを台座にバンバンと叩きつけた。・・・母親はこれ以上授乳することを諦め、彼をベッドへと運んで行った。後に彼女が私に語るには、〈もういいの。ほらね、あの子がMrs. Nのお家でどのくらい飲んだのかははっきりはしないんだけど。もしも飲まなきゃ飲まないでもいいの。無理強いして飲ませようとするでもないわね。実際、無理強いなんて、とてもペピには無理だもの・・・〉ということであった。

■第29回目の訪問 ペピ; 10ヶ月 & 1週目 1974/10/24 (4:45-6:50pm)

この日は「ハーフ・タイム half-terms」で学校がお休みだから、Mrs. Pは勤めには出ていない。そして夫のJ. も扁桃腺のため寝室で休養していた。ペピは明らかに両親のどちらとも大いに交流した後に違いない。とても生き生きとして安定しているふうに見えた。彼は寝室の隅のコットの中にいた。赤い上着にスマートな青色のズボンを履いており、その様は大きなタフガイみたいに恰好良かった。彼は周囲をとても観察していた。父親の方へ詮索するようなまなざしを向けて、ジッと見ている。そして母親と私がコットの真上の天井からぶらさがっているモビールを見上げながら、それはアヒルの形をしていてなかなか可愛いものであったが、それについてお喋りをしているのに耳に傾けていた。母親はそのモビールを手でクルクルと回しながら、ペピと父親のJ. とが一緒になってそれでどんなに笑い喜び合っていたかを私に語った。ペピもまた、いかにもそうだそうだと言わんばかりに微笑を浮かべる。われわれの会話の内容が実によく分かっているみたいで、自分も話に加わっているかのような、いかにも訳知り顔である。

母親は彼を居間へと運んだ。床に下ろして、〈さてと、彼を歩かせてみましょうかね〉と言って、彼の片方の手を持ち、もう片方は自由にさせる。すると1歩2歩と、彼は着実に歩み出していた。何かしら掴むものを探しながら、母親の支えからも自由に、何ら迷いもなしに、彼はからだ全体を肘掛椅子へと移動させ、その肘掛を両手で握った。それからまたさらに彼は1歩2歩と自力で歩いた。それで、〈よくやったじゃないの！賢い賢い！〉と、母親からそして私からも拍手喝采された。

母親は椅子に腰掛けていた。そしてペピを膝の上に乗せ、ヨーグルトを食べさせる。いかにもくつろいだ穏やか感じて彼はスプーンで何回かヨーグルトを食べさせてもらい、それから少しずつ落ち着きがなく

なった。そしてからだを背伸びさせたり後ろ向きになろうとジタバタする。明らかに彼の後方にある灰皿に手を伸ばそうとしていたせいである。〔それは彼の視界には入っていなかったはずだが、どうやら記憶されてあったに違いない。〕 母親は彼の注意を逸らそうと、くすぐりのゲームやら歌を歌ったりする。ペピはそれに応えて笑いはするものの、尚も気持ちが他のことに奪われているのは確か。母親はそれを了解し、彼を床に下ろしてやった。

彼は数歩どうにか灰皿がある台座へ向かって歩いてゆき、ようやくそこまで辿りつき、両手でその台座をしっかりと掴んだ。一方母親は灰皿の中のもの片付けて、綺麗に拭いて彼に灰皿を与えた。ペピはそれを台座にバンバンとぶつけ始めた。それから彼の立ち位置を変えて、母親が腰掛けていた肘掛椅子へ向かった。そして再び灰皿をその木製の肘掛にバンバンとぶつけた。それを一度床に落とした。(それはなかなか重たいものだった。) ここで慌てず騒がず、だがそれを手で拾うのに身を屈めるといった芸当はまだ彼には無理だったので、彼はただ身近にあったゴミ箱へと注意を逸らしてしまう。それから彼は中の物を摘みだし始めた。ティッシュやらあれこれ…。それらゴミ箱の中身を次から次へと引っ張り出しては辺りに撒き散らした。母親はそれらをすぐに拾い上げ、元のゴミ箱へと戻した。これは二人の間で或る種‘愉快的なゲーム’となり、どちらもクスクスと笑っている。たまたまペピはバランスを崩し、床にゴロンと転げてしまった。全然驚いたふうでも困惑したふうでもなく、すぐさま落ち着き払ってたまたま手の届く範囲にあった灰皿を手にとって遊び始めた。それから再びゴミ箱へと向かう。それをグイと手で掴んで、膝の上に抱きかかえ、中身を掻き回し始めた。それで母親は、もうこれ以上彼にゴミ箱漁りをさせるのはよろしくない判断し、それを部屋の隅へと片付けてしまう。

母親はペピと一緒に床に座る。そして彼に幾つものサイズが違うコップを示して、それでタワーを作ろうと促した。ところが彼はコップを掴むのが面白いと思ったのか、母親の‘遊び’に割り込んで邪魔した。そこで母親はその本来のおもちゃの使い方、つまり大きいサイズのコップにより小さいサイズのコップを積み上げてタワー作りを教えることを断念する。そしてしばらくして、クスクスと笑い、彼女はその一つを彼の頭の上へとチョココンと乗せた。ペピは幾らか考え深げに微笑を浮かべ、何やら頭の上にあると意識したのか、ちょっと上目遣いにして見ようとした。それから母親は、プラスチックのリングを手に取り、それを彼の耳に引っ掛けた。ペピはそれを察知し、手で掴み取ってはそのリングを放り投げるといった動作をする。これを延々と繰り返した。ペピはとても目の動きが敏速である。母親の動きをすばやく的確に追い掛ける。顔に自信ありげな笑みを浮かべながら…。

母親は肘掛椅子に戻り、あれこれ近況を語った。その一つは同居しているJa. がついに彼女自身のフラットを購入することを決めたとのこと。これ迄に20を超える候補の物件を物色し、ああでもないこうでもない文句ばかり並べていたのが、ようやくのこと決まったらしい。〈ほんと、もうまったくやれやれだね。ついに何とか決めてくれたわけだから…。彼女はまだ迷っているんだけどね。とにもかくにも万事正しい方向に進んでいるのは確かよね〉と彼女は安堵の面持ちで語る。〔つまりは、これでペピが彼自身の個室を持てるということになるという意味だろう。〕

それからクリスマス休暇に予定していたアフリカ旅行の話をした。ここずうっとしばらくの間、彼の地の親戚とか友人とかにあげるプレゼントを買い漁るのに大変に忙しい思いをしていたんだそう。それから彼女は顔を輝かせて、<ところがね、とんでもない、すごいことが起きたの。私、妊娠してたの。それはほんとうにすばらしい驚きでね。興奮したわ。われわれは何も知らなかったわけなの。全然そのつもりはなかったのだから・・>と報告する。というわけで、アフリカ旅行はどうしたものかとその是非を目下のところ思案している最中なんだとか。つい先日、彼女は天然痘の免疫の注射をしに医院に行き、そこで生理がちょっと遅れているという話をドクターにして、それで検査をしたら、そういう結果であったそう。胎児は2週間ということだ！

ペピはとても忙しげに、周りにある玩具をいじくり回すことに没頭していた。掴んだり、投げ捨てたり、舐め回したりと・・。そこに母親は大きな‘セインスベリー’の空箱を持ってきて、そこにあったすべてのプラスチックのリングを入れた。ペピはすぐさまそれに反応し、新しいゲームが展開された。彼はその箱の中へ手を突っ込んだ。それから一つずつリングを掴んで箱の外へと放り投げた。母親はまるでその逆をする。次から次へとペピの放り投げるリングを掴み取り、それを箱の中へと戻した。ペピはそれにはちょっと当惑したふうな顔つきをしたものの、この遊戯を続行した。一方で、母親は朗らかにいかにも愉快げにこのゲームに打ち興じていた。

母親は、ペピに入浴させるのにその支度のためバスルームへと向かった。ペピは私と一緒に残された。彼はその空箱そのものにひどく魅了されたふうで、それを引っ張ったり押したりしていた。そしてしばらくして、彼はたまたまその箱に小さな穴を見つけた。そして彼の小さな人差し指をその穴の中へと突っ込んだ。そして注意深く、彼は生真面目な、じっくりと吟味するかのような目つきでそれを繰り返した。それから何度か箱をタッピングする。そしてたまたまその箱に貼られてあった紙がちょっと剥がれているのに気づいた。それで親指と人差し指とで掴もうとする。そして引っ張って剥がそうとしたのだが、そう簡単にはうまく行かない。彼は手を休めて、私の顔を見あげた。私は、<やっでご覧。ほら、引っ張って・・>と言うと、再び彼は辛抱強く続けてゆき、どうにかそれを剥がすのに成功した。それも左手で・・。彼は手のひらに小さな紙の切れ端を握っていた。そしてすぐさまそれを口に入れた。そしてそれをしゃぶるやら吐き出すやらをする。彼はそうしながらも、自分の親指をも吸っていた。そしてしばしば私の方を振り向いて、私の顔を友好的でリラックスした面持ちでじっと観察しているふうに眺める。そして時折、彼は私のほうに向かってフッフツと忍び笑いをするのであった。それがどういう理由なのかはさっぱり分からなかったけれども、ただ今や彼は私を私として眺めているということははっきりしてきている。まるでペピは私に、<今やもうだいぶんあなたに慣れてきたよ、変な人！(I am now get used to you, my funny lady)>と言わんばかりだわね、と私は内心呟く。そして私としては言葉を交えず、こうして彼とお互いを知り合う親密なひとときを持てたことを大いに愉しんだのである。

さて、入浴となり、バスタブの中で彼は自由気儘に<イアー、イアー、ヤー>とか<ダ、ダア、ダー>などと喃語を発していた。母親は大いに愉快そうにこの遊びに加わる。彼の言葉を模倣したり、そこに

新たな音を増したりする。〈クワッ、クワッ…〉やら…。おそらくこうした音もペピには耳慣れていたんだろう。ごく簡単に、母親に倣って、〈クワッ〉という音を上げた。今や彼女はそこに〈ミャオー〉という音を加えた。彼は恰もそれで猫の鳴き声を連想したかのように、笑みを浮かべ、そして考え深げな顔付きで母親の顔を見上げている。体を洗い終わってから、母親は彼を抱き上げてお湯から出した。それから彼をマットレスの上へと寝かせた。すぐに彼は落ち着きを失い、幾らか抵抗するぐずり声をあげた。そこで母親は彼にプラスチック製のアヒルさんを与えた。大きな嘴がある。それをペピは両手で掴んだ。そしてそのアヒルさんの口を夢中で吸い始めた。そして徐々に片方の手が自由になったかと思うと、それがペニスへと向かい、彼はペニスをいじり始めた。母親が彼を立たせて、パジャマを着せる。そしてそのボタンを留めようとする、彼はバスタブの方に視線を向けながら、躍起になって母親の腕から逃れようとした。そこで母親は彼の手を掴んだまま支えてやり、風呂のお湯が流れてゆくさまをじっくり思う存分に彼に眺めさせた。

さて、授乳の時間となり、ペピは母親の腕の中で哺乳瓶を掴んでいる。時折自分の指でそれをトントン叩くやら撫で回したりしている。彼は母親の顔の方へと手をすこし上にあげた。そして母親はその手を彼女の口に咥えた。そこで彼の人差し指は彼女の唇の間に挟まれた恰好でくねくねとうごめいている。とてもやさしく穏やかに…。しばらくして、母親は笑みを浮かべながら、〈誰だったかな？今朝、われわれのベッドに居たのは…おまえさんは、それはダメなのよ、許されてはないうってこと(You are not supposed to…You are not allowed to…)〉と語る。それから母親が私に、〈夫のJ. がね、ペピは電気毛布が欲しいんじゃないかって言うの。親達だけが電気毛布を使っているのはフェアじゃないんじゃないかって。そこで私、言ったのよ。そうでもないわ。ペピは随分とあったかいものって…。そうでしょ、ダーリン？〉と腕の中のペピに彼女は尋ねた。哺乳瓶は空になったので、母親はペピを寝室へと運んだ。やがて、彼は父親とベッドで寝る前のお遊びをしているのか、賑やかに語らう声が聞えてきた。

帰り際、私はMrs. Pに〈どうぞ、おからだをお大事に！〉と告げた。一瞬彼女は微妙なおかしげな顔付きを見せ、恥じらいながら肩をすくめるジェスチャーをし、そしていかにも幸せそうな微笑をした。

■第30回目の訪問 ペピ;10ヶ月&2週目 1974/10/31(4:45-7:35pm)

ペピは居間に居た。母親の膝の上で、大きなハッピーな笑みを浮かべて私の顔をまっすぐに見た。それから突然母親の方に向きを変え、母親にさも興奮した面持ちでガバッと抱きついた。そして再び彼は私を見上げて、また母親に向きを変え、ガバッとしがみついた。彼女もまた笑いながら彼をしっかりと抱きしめた。彼らはこれ以上ないほどにハッピーかつ上機嫌であった。この‘抱きしめごっこ’のゲームを大きな喜びをもって続けた。さてそこで私は、彼が着ている服にコメントした。ズボンに手編みのセーターなのであったが、〈ほんと、ペピが随分と大きく見えますわねえ〉と。その青いセーターは少し前に母親が編んだのだが、それが彼にはちょっと大きめに仕上がったので、彼女はちょっと気にしていたのであった。母親は〈夫のJ. は青が好きなの…〉と私に言って、ペピに〈だからね、おまえさんにお父さん

は青い色のものを着せたがるわけなのよ>と穏やかな笑みを浮かべながら語りかける。

母親は彼を床に立たせた。片手を支えながら・・。ペピは母親の介助なしに充分安定しており、それから彼は私の方へと慎重に歩みを進めた。そしてしっかりした足取りで数歩ほどでどうにか私が座っていた椅子のところまで辿り着いた。

そしてそれから母親は、彼の手をベビーサークルの柵に掴まさせると、彼から身を離れた。そしてくほらね、歩いて・・>と、自分の両腕を彼の方に伸ばして彼に歩みを促す。ペピは体の向きを変えて自信ありげな面持ちで笑みを浮かべ歩みを始めた。断然その気でいたのだが、母親はちょっと遠すぎたようだった。それでちょっとどうしようかなといったふうに一瞬迷った。母親はすばやくこの事態を察して、彼の方へと距離を縮めた。床に膝を付き、両腕を彼の方へ差し出した。そこで彼は1歩2歩と懸命に歩みを進め、ついに母親の手をやっとのことで掴み取る。大きな安堵がその顔に浮かんだ。

さて今度はさらに勢いついて歩みを進める。甲高く<イエ、イエ、イヤー>を叫びながら、まず最初に私の手、それから肘掛椅子、それからついには最終目的であった、私の傍らにあった台座の上の灰皿へと辿り着いた。彼はすぐさまそれをしっかりと掴み取り、口に持ってゆき、舐めた。〔事実、それはガラス製のとても重そうな灰皿であった。〕そして時折彼はそれを床に落とすのであったが、それを今や難なく拾い上げるといったスキルをペピが身に付けたことを認めた。

母親は、ペピに大きな空箱を用意し、そしてその傍らに彼を座らせた。母親はいろいろサイズの違うプラスチックのリングをそれに投げ込む。ペピはすぐにそれを了解し、掴み取り、噛んだり、しゃぶったり、そして撒き散らしたり・・。母親は、その一つを手に取り、<こんなふうにしてご覧>と箱の中へと入れた。だがペピは母親の意図を捉えられずにいた。そして断然‘彼流’をやっている。母親はくほらほら、見て見て・・ペピ、こんなふうにするのよ>と言う。そしてそこらに撒き散らされたリングを箱の中へと投げ入れた。ペピがその傍らでリングをあちゃこちゃと撒き散らすのと競争するかのよう・・。そして興味深いことに、ペピが一個のリングを箱の中に、たまたまその気はなしに、投げ入れたものだから、母親は単純に喜んで、<賢い子！>と褒めた。彼女はクスクス笑いながら、その‘賢い’トリックに興じていた。それから彼女はリングを彼の脚に嵌めるやらして、<くほらね、嵌っちゃったでしょ。身動きできないわね>と言う。ペピはしばらくほんの少しジッとそのまま動きを止めていたが、やがてそれを取り外そうとする。だがうまく出来ない。そしてしばらく間を置いて、彼はからだをよじる。するとたまたまそのリングは外れた。母親は感嘆し、<あらまあ、やったじゃないの>と彼に言う。それから母親は再びリングを彼の両足に嵌める。今度はどうも取り外しは難しそうである。ペピはどうしようといったポカンとした感じになったが、それからそれらの取り外しを試みる。が、うまく行かず、やや欲求不満になる。母親が、<いけないママね。おまえさんをちょっとからかっているというわけ・・>と言って、クスクス笑う。しかし彼はリングの取り外しを続けている。そしてついにそれは外れた。<あらまあ、やったじゃないのさ(Clever Clog！)>と大げさに彼を褒めた。その少し後で、彼女は<‘箱の中の男の子’ってのはどうかしら？>と彼に言う。

そして彼を両腕に抱き上げ、その箱の中へと入れた。彼はどうなっちゃてるのか分からないよといったふうに収まっていたが、母親はそのペピが入っている箱をそのまま前後に押し引いたりしている。<シュ、シュ、シュ…これは汽車だよ>と…。ペピの顔に徐々に笑みが浮かび出した。母親の方に好奇のまなざしを向けながら、それが彼女と一緒にすごく愉快的な遊びになるってことが了解できたようであった。

さて、それからベビーサークルの中で立ちしていたときだが、ペピはそのベビーサークルに繋げてあった‘ガラガラ’の玩具の紐を噛んでいた。そして時折彼は私の方へ愛嬌のある笑顔をチラッと向けてくれる。それからまたその紐を噛むやら、周りにある玩具をあれこれ物色するのであった。私は肘掛け椅子に座っていて、徐々に私の想いに気を奪われていた。ちょっと疲れていたせいかな、あくびをした。それからペピがどうしているかと彼の方を眺め遣ると、なんと彼もあくびをしていたのだ！私は自分の眼が信じられなかった。だが真に彼は何度かあくびをし、その顔には悪戯っぽい笑いすらも浮かべている。私はその彼の反応にひどく興味をそそられ、事実を確認しようとした。<私の真似したのかしら。じゃあ、もう一度やってみるわね>と言って、私は口を大きく開けた。だが咳が出てしまう。すると驚いたことに、彼は私そっくりに咳をした。目撃するあらゆるものをそこまでみごとに摂り込む彼の能力には圧倒され、大いに笑った。ペピはクスクス笑いを顔に浮かべていた。恰もそれも面白い‘ゲーム’だと言わんばかりに…。

母親が戻ってきた。何が起きたのかを私から聞いて、すぐさま彼女も<見て、見て…ペピ>と言って、あくびをして見せた。しかし彼はすっかり他のことに気を奪われており、それどころではなかった。そこで母親は<この子は、時々歌にも合わせて歌うときがあるの>と言い、<ペピ、少しの間ピアノを弾こうね、入浴する前に…どう？>と彼に訊く。そして彼女はピアノの前の丸椅子に彼を連れて行った。<違う…違う…そうじゃないの、両手を使うのよ>と言われて、彼はどうにか結構うまく恰好をつけた。そして鍵盤を軽くトントンと叩いてゆく。母親が<そうそう、大変すてきなメロディーでしたわねえ>と褒める。今度は母親が子どもの歌を弾いてやる。それにペピの奏でるハチャメチャな音が混じる。彼はとても意欲的かつ執拗に鍵盤を叩く。そこで入浴のためにピアノから去らねばならない段になると、ちょっとペピはご機嫌斜めとなる。

バスルームで母親がお湯を掻き回し、<ほらほら、水を撥ねてごらん、ほらね>と言う。それでペピが水の面を思い切り叩いたものだから、大きな水飛沫があがった。母親は<あら、まあ大変>と思わず叫んで、そして1歩退いた。ペピは尚もごくごく真剣な顔つきでこの水の面を殴りかかるゲームに取り掛かっている。やる気満々である。その形相にわたしたちはつい笑ってしまう。彼は私たちの存在をまるで気にしないふうに、ひたすら自分のやることに没頭していた。彼は勿論水浸しとなった。母親が彼の顔をフラネルで拭いてやる。彼は彼女の顔をちょっと笑みを浮かべて見上げたが、いくらか心ここにあらずといった感じで、さらに水の面を殴りかかるというもっと重大な仕事に立ち返った。かなり執拗にかつ暴力的に…。母親は、<くたびれ果てちゃうわよ>と言う。事実、いったいどこからそのようなエネルギーが来るものやらとわれわれは訝った。攻撃性 aggression を発散させる‘安全弁’を探しているということなのだろうか、と私はふと思った。彼はそれを10分ほども続けた。われわれはただ呆れて眺めていた。

父親のJ. が顔を出した。母親が〈この騒ぎが聞こえたの？〉と尋ねた。それで誰もが爆笑した。

母親は彼を抱き上げて、マットレスに寝かせた。ペピはすぐさま焦れたふうに、〈いやだ、ぼく、もっとやる！〉と言わんばかりに抗議する。母親は、〈いいえ、もうダメ…もうほんとにくたびれちゃたでしょ〉と応え、彼の体を拭いてやる。しかしながら、ペピはそう簡単にはおとなしくならなかった。尚も不平を鳴らすかのようにブブブグズっている。そして両手を空へと突き上げる。そして間もなく、その手は母親の顔に届いた。すると、彼はほんとにその母親の顔を引っ叩き始めた。水の面に殴りかかったみたいに、執拗に。まるで抑制しかねる怒りの捌け口を求めるかのように…。母親は彼をバスタオルで覆う。するとペピは母親の手から逃れようと四苦八苦する。からだがりっくり返る。母親は片手でオムツを持っていたものだから、ペピを掴めそこなう。彼はそのままバタバタと這って、彼女の手から脱け出し逃れようとする。顔には悪戯っぽい笑みが浮かんでいる。母親は、〈何しようとしているのか分かってるんだから…(お目当ては洗剤の)‘Vin’なんでしょ…〉と言って、母親は彼を捕まえ、そして元の位置マットレスへと彼を引き戻した。それからベビーパウダーを彼のお尻に振り掛け、そしてオムツを付けた。しかしペピはまるで気もそぞろで、彼の次なる‘獲物’、すなわち洗剤‘Vin’をものにしようという野心に気が奪われている。そして再び彼は母親の手を逃れることに成功する。なにがなんでもやるぞとばかりに悪さすることに熱中している。ひたすら這い這いして前進あるのみなのだ。母親は〈あーあ…〉と溜め息まじりに笑う。彼女は彼の後を急いで追掛ける。‘Vin’の洗剤をトイレの裏へと片付けてしまう。そしてペピを元の位置マットレスへと戻す。またもやグズグズしたぐずり声をあげていたが、プラスチック製のお魚さんを与えられ、どうにか落ち着いた。母親は大急ぎでやつのこと彼に服を着せ終えた。

さて、授乳となり、母親の腕の中でペピは哺乳瓶をグイグイとむさぼり飲んでた。彼は時折その瓶を手で軽く叩いている。それから今度は母親の顔に手を伸ばす。母親は軽く腰を屈めて、彼の手をキスをした。そして彼の指は母親の口のなかへと押し入る。しかし母親は唇をやや固めに閉じている。(いくら彼をからかっているつもりであつたらうが…)それで指は中へと押し入ることが出来ず、ペピはちょっと焦れて苛立ったふうだったが、直に母親の顔中のあちこちを人差し指で探索し始めた。頬に触り、そして口(固く閉じている)をも、それに彼女の鼻の穴も…。一度などは手のひらでその鼻をぎゅっと掴まんばかりであつた。そしてほんのちよつとの間だがそれを手にいじろうとしたので、ついに母親はのけぞって、これを押しとどめた。それから哺乳瓶でミルクを飲み干した頃には、彼はもうすっかり眠たげで、うとうとまどろみ始めている。そこで母親は彼を寝室へと運んでいった。

彼女が居間に戻ってきて、安堵感を浮かべながら、〈やれやれ、これでようやく一日が終わったことになるわね〉と言い、最近のペピの変化について嬉しげにその印象を私にお喋りした。彼女はペピが、禁止のNO(ダメ!)に対してクスクス笑いで反応するという事に触れ、彼はそれを‘愉快的ゲーム’と思込んでおり、尚もやろうとするんだとか。それで今朝などは、彼に着替えをさせるのに20分も掛かったんだとか。実際のところいつもだと5分で済むところを…。母親は、〈いつかペピが物事の善し悪しを充分わきまえられるようになる日の来るのが待ち遠しいわ…〉と語り、そして柔らかく微笑んだ。

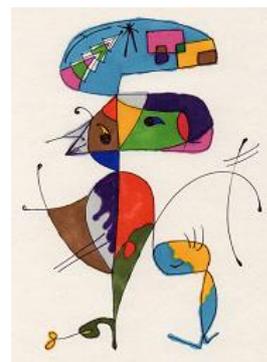
■後記■

Mrs. Pの妊娠はほどなく流産となった。母親は<健康な子どもが欲しいのだから、いいの・・>と語り、泰然としていたという記憶が蘇る。この時期、おそらくペピは生後11ヶ月頃であつたろうか。既に一人で立ちが出来るようになっていた。片手で母親に支えられ、数歩歩き出している。家中あちこち這いずり回り、探索行動に拍車が掛かってゆく。特にこだわりはトイレそして電気ヒーターであつた。<いけません(No！)>が判ってきたものか、この‘探検家’はもはや嬉々として傍若無人に振舞うことはない。慎重である。或るときなど私のベルトのバックルに触り、一瞬私の顔をチラッと見上げた。つまり私を警戒し、顔色を覗っている。また或るとき、彼は同居人のJa. と一緒にいた。そこで彼がラジオに触ろうとする。間髪を入れずにJa. が<No！>を言う。すると反射的に彼は手を引っ込めた。ペピはどうやら禁止に関しては母親よりもJa. の方に素早く反応する。つまりJa. の普段の性格から<悪ふざけは許しません>といった彼女のメッセージをペピが承知していたということだろう。彼は人の品定めが得手だ。事実Ja. が彼を可愛がっていたのは明らかで、両手を打ち合わせるやらバイバイと手を振るしぐさをペピに模倣させ、彼もそれによく反応していた。彼は大人たちのすることに興味津々であり、家族の一員として、すっかり日常の生活環境に溶け込んでいる。だが、概してこの時期、ペピの機嫌がいいとは言えない。その背景には、この時期に妊娠および流産といった、母親の安寧が脅かされていた事実があつたからとも思われる。どうにも屈託が窺われた。心が軋(きし)んでいるといった具合である。全般的に反応が鈍い。焦れて苛立っていることが多かった。自立心の芽生えとともに、欲求不満も嵩じてゆく。自意識の傷つくこともあつたろう。自分の無能さに躓き、腹立たしく覚えることもなくはなかつたろう。なかなか厄介な雲行きであつた。それもペピが1歳を迎える頃には徐々によくリラックスした風情が出てきて、時折私にも愛嬌を振りまくことがあつた。

(2014/07/20 記)



ペピ; 悪夢のとき



ペピ; 叱られて

【イラスト画:1981】
